



「ただいま」

「おかえりなさい。陽介、アメリカに行ってる叔父さんから小包が届いてるわよ」

学校から帰宅した僕に母親が居間から声をかける。

「康之叔父さんから？」

僕の叔父は長い事アメリカに会社の都合で住んでいて、たまに帰国すると家に遊びに来ては、お土産やむこうでの話を聞かせてくれる。

すごく気さくな人で、僕の事をよく可愛がってくれた。

（お願いしてた、ゲームかな？それともこないだみたいなエッチな雑誌だったりして……）

去年自室で親には内緒な、と言われて渡されたのが、その雑誌だった。

『陽介も来年は○学生だからなア。もうオナニーしてるんだろ』

……よく考えるとデリカシーの欠けた叔父だと思う。

僕は恥ずかしくて何も言えなかったが、女性の身体に興味があつたのは確かで、内心喜んだ。

そんな叔父だから、またとんでもないモノでも送り付けて来たんじゃないかと不安な反面、期待している。事実、貰ったアレはどぎつくて、何度も何度も猿みたいにしこりまくった。

部屋に戻ると一応扉にカギを掛け、小包を開ける。

DVD程の大きさしかないな……と思ってる、中身は正にそれだった。

自室のプレイヤーで再生する。

目に飛び込むクリアな青い空と、白い砂浜。

叔父の赴任先からアメリカのどこかの海岸か。

プライベートビーチのように誰もいない……

そう思っていると海の法から誰か走ってくる。



背格好は僕より少し低いくらい。

すらっとした白い手足。潮風に揺れるブロンドの髪。

透き通るようなブルーの瞳がこちらに向けられている。

……僕はその異国の少女に目を奪われる。

赤いビキニ姿を穴があく程、見つめ続けた。

動悸は高まり、体が熱くなる。

……一目惚れって奴じゃないか、これって？

彼女はカメラを見下ろしながら、ニツと笑う。

真っ赤な舌と牙のような犬歯が覗く。

『ヨウスケ見てる？初めまして、だね』

何とも流暢な日本語にも驚きだが、彼女が口にした名前にも驚く。

『あっはは、ニホンゴ上手いでしょ？これ、ヤスユキに習ったんだよ』

こちらの考えを見透かしたように続ける。
叔父さんにか。なら、僕の事も話していてもおかしくない。

『あたし、ステイシーって言うの。ステイシー・ローズマリー。ヨウスケよりふたつ、年下だね』
同じ年かと思っただけど、二歳も年下だったとは。
確かに色香はあるけど無邪気な表情や顔立ちは年相応に見える。

しかし、叔父さんどこまで僕の事を話しているんだ？
それにこの子との関係性って……

『アタシねー、ヤスユキの趣味フレンドのムスメなんだ。
ニホンジンは結構珍しいから、思い切ってニホンゴの
コーチをお願いしたの』



こちらが知りたい事を見透かしたかのように続ける。

『ニホンにはunionhigh schoolの甥がいるって聞いたよ。すぐく、エッチなんだってね』

……おい。

当の彼女は目を細めて嬉しそうにHahahaと笑う。

見も知らない、心奪われたばかりの女の子に軽蔑された。そう、思っていたのだが。

『……あたしねー、エッチなオトコのコって大好き』

ニヤニヤした笑みを浮かべながら、カメラに向かいグツと腰を突き出す。



金髪少女の股間が強調される。
海水に濡れた水着がしっとり肌に張り付き、ステイシーの
形状がうっすらと浮かび上がっている。

『ヨウスケ、ドコ見てる？ココ？』

彼女はイヒヒツと笑う。さっきまでの無邪気さはどこへやら、
今は何というか、凄くエロい。

何とも言えない、エッチな表情を浮かべると、水着をグツと
掴む。

サービスとも言わんばかりの顔で、グイッと引き下ろした。



赤い布地の下からぶっくり膨らんだ陰唇が現れる。
縦にスウツと切れ目が入り、溝がお尻のほうに続いている。
ぴよこんと飛び出した指の先ほどの包皮のテント。
それがクリトリスだという事は僕にもわかる。
突然の事に頭が着いていかない。

しかし、どうしようも無いほどオチンチンは硬くなっている。
初めて見る年下の女の子の、しかも目も眩む金髪少女の割れ目。
届くなら、自分の指で押し開いて見たかった。



水着をおろす手がぴたりと止まる。もう少し下げれば、女子の大事な部分が全て見えるはずだった。

『今回は、ここまでね。続きは会ってから♡』

からかうような仕草でひらひら手を振った。動画は途切れるようにそこで終わる。ただの自己紹介用の映像だった。

ちくしょう、もう少しだったのに……

……ん？

会ってから？

彼女の言葉を頭の中で繰り返す。

送られてきた小包を調べると、手紙も同封されてる。
叔父からだ。

「陽介、元気してるか？」

暫く帰れないから、お前に特別なプレゼントを贈るぞ。
この子はステイシー。こっちの○学校に通う女の子で、
俺の知り合いの娘だ。可愛いだろ？

日本に凄く遊びに行きたがってるから、お前の家を紹介した。
予定日は○月×日だ。

元気でノリのいいアメリカ娘だから、友達になってやってくれ。
……手を出してもかまわんぞ。」

さっきの光景が頭に浮かぶ。

手紙にはまだ続きがある。

「何があっても、驚くなよ。」

驚くなよ……

何やら意味深な言葉で締めくくられている。

しかし、一目惚れした相手に会えると思うと、そんな事、
どうでもよくなった。

ホームステイにこんな可愛い娘が来るのだから。

もしかしたら、漫画みたいなエッチなハプニングがあるかも
知れない。

スケベそうな女の子だから、色々と見せてくれるかも……

思春期の男子らしい期待に胸を膨らませて、その日が来るのを
待つ。

サイコーの夏休みになりそうだ。

……正直、この時ほど度肝を抜かれる事は無かった。
ステイシーは、一人、一じゃなく、二人で来たからだ。

流暢な日本語。気さくな笑顔。そんなものは僕にとって
どうでもよかった。

彼女のお腹に目が吸い付いて離れない。

「あの……それって」

かろうじてそれだけ言っていると、指でぼっこりと膨らんだ少女のお腹を指す。

家族総出で出迎えた僕等の目が点になる。母など卒倒寸前だ。

「ああ、これ。マイ・ベイビー」

「………ニ0000000000000000」

……あれから色々あったが、今は何とか平静を保っている。
家族も、無かった事としてステイシーのお腹には触れない。
逆境には強いんだ、僕の家族は。

でも、落ち着いてくるとますます悶々としてしまう。

だって、アレをしないと子供は作れないんだから。
僕よりも、年下なのに。物凄く生々しい。

粉々に恋心が砕けたはずなのに、ペニスは大きく膨らんでいる。

あの身体で、男を受け入れてるんだ……

クラスメイトかな、それとも……



（あの足の間に、短いズボンとパンツの向こうに……
ステイシーのお腹の中にチンコが侵入したって事だよな）
その光景を想像し、ズボンの中でペニスがビクビクとのたうつ
のを感じる。

とんでもないプレゼントだよ、叔父さん……

「何やってるの？ヨウスケ」

「うわッ」

突然声を掛けられて思わずのけぞる。

「アハハ、ファニーな顔！」

いつの間に入って来たんだ。

彼女は悪びれもせずキヨロキヨロと自室を眺めてる。

まるで猫みたいだ。

「ねえ、ヒマなら遊びに連れてってよ。アタシ、プール行きたい」
積極的だな、アメリカンは。

でも、不思議と嫌じゃなかった。

彼女が僕の好みと合致してるからか。

……これでお腹が膨らんでなきやサイコーなんだけど。



僕は彼女の目を盗んで、下をチラチラ見る。
デニムパンツの合わせ目の向こうに下着が見えた。
ピンク色の布地が薄っすら透けて……

『……………!』

大きなお腹で圧迫されて締め切り切らないファスナーが開き、
ちようどその突起が女の子特有の形状を僕に見せつけている。

大きめのクリトリスが下着を押し上げている。

こないだの動画の通りのものが、隠されているはずだ。
隙間に思わず手をつっ込んでみたくなる。



「いいけど……水着持ってきてるの」

「モチロン！それともヌードで泳ごうか」

ニヤリと笑いヨウスケってエッチなんだよね、と続ける。
赤くなりながらも、思わずまた、お腹に目が行く。
やばい、勃ってきた……

ズボンが膨らんだのが自分でもわかる。
ステイシーには勿論、バレている。

ニヤ〜と犬歯をのぞかせながら笑う。

「お腹のパパは、プール行ったら教えてあげる」



近く……だと知り合いに会いそうなので、隣の市の
普段利用しないプールを利用する。

先に着替えて待っていると、

「ハイ、お待たせ」

背中に声を掛けられて振り向く。僕はそのまま固まって
しまった。

こないだの動画の水着とは別物だ。

あまりにも布の面積が小さい。マイクロビキニって奴？

殆ど裸に近いぞ……



危惧した通り、お腹の膨らみは丸出しで、むしろ強調してる。
辺りからざわざわと声上がる。
どう考えても少女にしか見えない女の子が、交尾の証拠を
お腹にぶら下げて堂々と歩いているのだ。

そういえば、男性比率の異常に高さはまるで男湯みたいだ。
男達に浮かぶ視線と笑みは興味と好色そのもので、
ステイシーの身体つきをねめつけるように見ている。



後で知った事だけど、そこは小×××者の密かなスポット
になっていたと知った。

珍しい金髪洋炉の登場に、男達にはわかに色めきだつ。
そんな事は露知らず、僕はステイシーの水着姿に
見惚れていた。

膨らみきったお腹はだぶんだぶんと揺れている。

あの中に赤ん坊が入っているのか……

彼女は涼しい顔をして男達の興味本位な視線を
受け流している。

もはや、慣れっこといった様子だ。



「ヨウスケ、ノドかわいちゃった。何か買ってきてよ」
ひとしきり泳いだ後、水から半身を出しながら、
笑顔で声を掛けてくる。
水に浮かんだぷりぷりした可愛らしいお尻を眺めながら、
奴隷のごとく自販機に向かう。

その時、僕とは入れ替わりに、目つきの怪しい連中が
プールの方に向かっていった事に気付いた。
女性子供は少なく、閑散としている時間帯。

(早めに戻った方がいいかな?)

何だかんだ言っても女の子一人置いておくのも抵抗があった。



「♪♪♪」

陽介がジュースを買いに行くと、少女はもう一度鼻歌混じりに水の中を歩き始める。

ちようと真ん中位に差し掛かった頃、山のように「つつ」した塊にぶつかった。

「オソーリイ……」

ステイシーの二回りはあるかという中年男が目の前に立ち塞がる。

彼女は男を避けて進もうと思ったが、大きなごつい身体がそれを阻む。

「ちよつと……Hay! ゲットアウェイ!」

睨み付けて威嚇しようとした矢先、下半身に何かが這い回る感触。

男の太い指が、彼女の尻に食い付いている。水着をめくり上げ、尻肉を揉み解す。



男の両手が挟むように少女の尻肉を掴み、上下に撫でこする。指はもどかしげに細い水着の紐を弄っている。厚い胸板に押し付けられ、ステイシーの水着がずり上がる。成長途中の乳房とコリコリした乳頭が擦り付けられている。

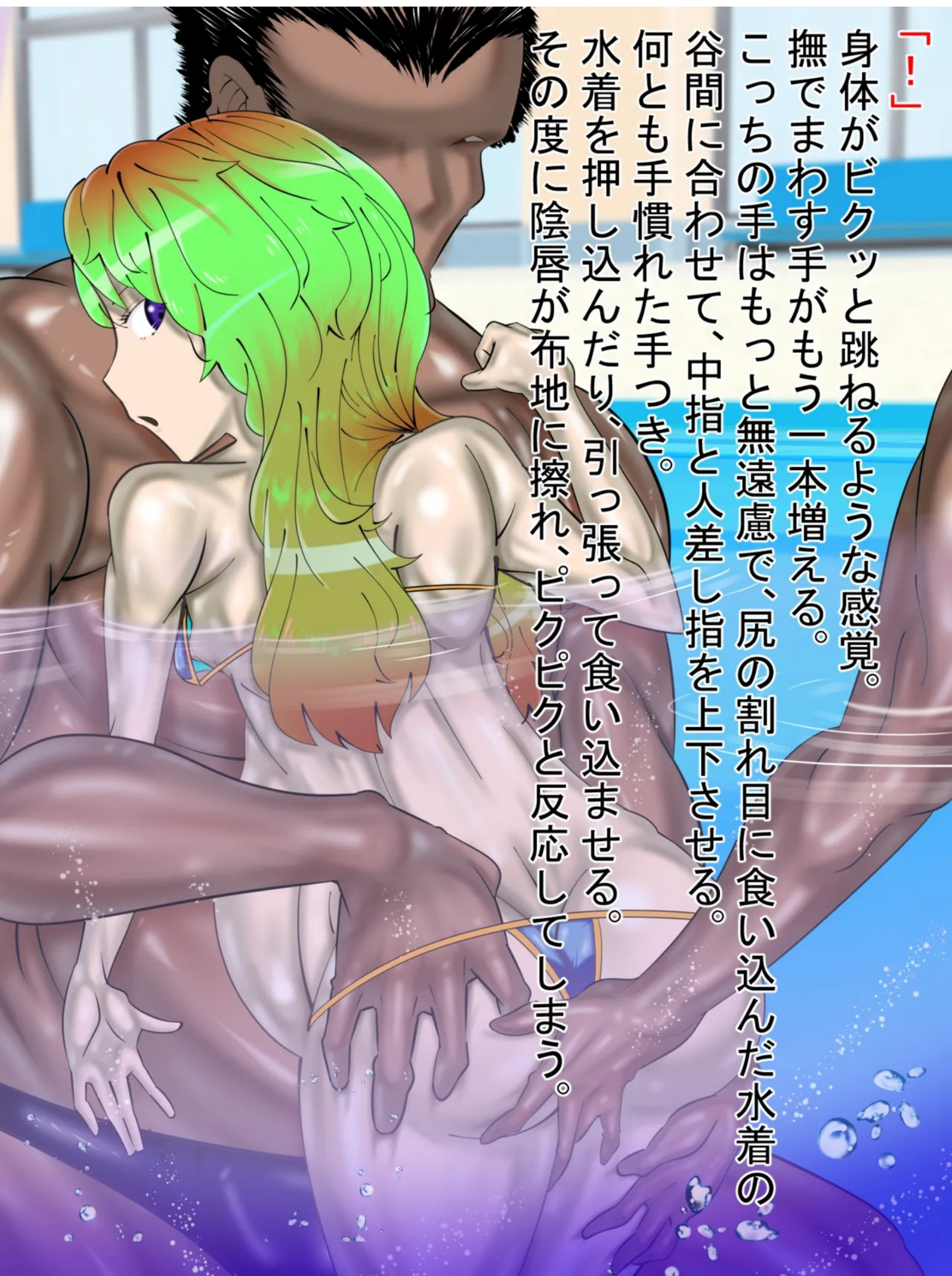
「んくッ、ん……はッ……う」

お尻を開いたり閉じたり、その度に肛門が横に伸ばされ、水に大きく触れる。



身体がビクツと跳ねるような感覚。
撫でまわす手がもう一本増える。

こっちの手はもつと無遠慮で、尻の割れ目に食い込んだ水着の
谷間に合わせて、中指と人差し指を上下させる。
何とも手慣れた手つき。
水着を押し込んだり、引っ張って食い込ませる。
その度に陰唇が布地に擦れ、ピクピクと反応してしまう。





指の腹で水着の食い込んだ割れ目をクニクニといじる。
もう一人の男も少女の排泄の穴の両脇に指を添えて、
左右にくぱくぱと押し開く。

「おッウー！そ、そこは……!!」

指先が水着と肌の隙間から侵入し、割れ目の溝をほじくる。
熱を帯び始める下腹部。
太腿に押し付けられる塊も同様に熱く硬くなっている。

後ろの男が股間の塊を押し付けてくる。
太腿の間を熱い棒状のモノが滑るのを感じる。

ズボツと股間の部分から浅黒く膨張した太い茎が突き出た。
「へえ……ジャップの癖に大きいじゃん♪」

悲鳴を上げるどころか、嬉しそうに指を這わせる。

ペニスの扱いに、相当慣れているであろう指先の動きに

男は破顔する。

「こりゃ、当たりだ。○キの癖にとんでもねえビッチだぞ」

少ないとは言え、辺りに人影はある。
水の中では大胆にも、露出した男性器を少女が愛撫している。
ペットボトル大の太い茎を根元からくびれに向かい撫ぜていく。
パンパンに膨らんだ亀頭に到達すると、優しく全体を包み、
先っぽの鈴口を指先でくりくり弄る。

ペニスがビンッビンッと跳ねるように反応する。
少女の何かを企んだような笑顔。
中指を少し立てて、亀頭の穴に先を埋没させる。



「おふッ!？」

たまらず男から声上がる。

尿道口が広がり、細い指先を咥えているからだ。

「どう? キモチいいでしょ?」

指をくちゆくちゆと掻き回し、尿道を刺激する。

「おッおッおうッうッ」

情けない声を上げながら、腰をガクつかせる。

ステイシーは満足した様子で、ズボツと指を引き抜いた。



「へえ、ジャップも勇氣あるわね。見直したわ」
大男三人に囲まれても臆する様子はない。
それどころか小馬鹿にするようなポーズを崩さない。
「アタシ連れがいるんだ。どこか人気のない場所で、ね？」
中年男が頷く。

「あ、ついでに先に帰った事にしといてよ。
もうすぐその男の子がジュース買って戻ってくるから」
切れ長の目ウィンクしながら声を掛けた。



使用されていない昔のロッカールームを合鍵で開ける。鍵は男の一人が、同じ趣味の施設の関係者に金を渡して作らせたものだ。

「連れ込む、時に重宝している。」

報酬として都度に動画と写真を渡して口止めしている。施設の最奥にあるので外部に声が漏れることもない。

さつきからガタガタと中から音がする。

複数の男達と少女の話し声。

室内では、我慢しきれなくなつた変質者たちの宴が始まろうとしていた。

「けへへ、良い格好だな、金髪の嬢ちゃんよお」

○供にオシッコをさせるような格好で、少女は抱え上げられている。

足を大きく開かせ、股間を覆う小さな布の部分に男達のギラついた視線を集めていた。

ムフマイ...

トレイシーは嬉しそうにゾクゾクと身を震わせる。

「アンタ達、普段からアタシみたいな子をここに連れ込んで、イタズラしてるってワケね」



「よく分かってるじゃねえか。お前も同じ目にこれから
遭うんだよ」

男は屈みこむとステイシーの股間に顔を近づけ、水着を
ずらす。
ちろちろと厚ぼったい舌を伸ばし、ジュルルツと陰裂に
吸い付いた。

ジュルルツズボボツ

溝の上部の突起を鳥のようについばみ、小豆大の敏感な
球体を舌で舐めしゃぶる。

「OH! アッウウッ!」

甲高い少女の声が汚れた室内に響き渡る。



「いッイッ！イイわ……アッハアッ！ウウッ！！！」

腰を大きくグラインさせて、男の唇に自ら大陰唇を擦りつける。

「オウうつうつうつツ!!!!!!」

包皮から陰核を吸い出すとひと際大きく戦慄いた。
クリトリスはピンピンに勃起して尖っている。

「いぎッ いぎッ、イツくう！ イイツ、あッアッあッアッ」
軟体動物のような舌先を尖らせ、グミのようなクリトリスを
くりゆくりゆする。
唇全体を割れ目に被せ、小さい尿道口からその下の膣口まで
べろべろと舐めていく。

少女のつま先がピンツと伸びた。
軽くイツたらしい。
体内に続く穴から粘ついたゲルがトロトロ溢れだした。
その穴に舌先を沈める。



「ひゃうッひゃふッあオオオオッ!!!!!!」
舌で刺激するたび、内側がウネウネとうねながら、収縮する。
穴に口づけるとちゅううッと吸い付く。
「アひッ、あひッ! あッ、あッ、おッ、おううッ!」
嬉しそうな悲鳴。

輝くようなブロンドヘアが震える。
洋モノ少女を責め立てる快感に男は興奮しきっている。



ビクンビクンと律動し太い血管が脈打つ赤黒い物体が少女の目の前に突き出される。

「へえ、思ったより大きいじゃん」
真っ赤な舌先をぺろりと出して品定め。

男はゴシゴシとペニスを扱ぎ、準備を整える。

「サイアク……そのDickをアタシのpussyにぶち込みたいワケね」



それを眺めながらカメラで撮影し、空いた手で「し」と一物を扱く。

「こりゃ高く売れるな。たまんねえ……!」
大きな腹がゆさゆさ揺れる。

「この腹のパパは誰なんだ?ええ、オイ」

男は笑いながら少女の腹を指さす。

ステイシーはその質問に涎を垂らしながら、カメラをねめつけ、ニタリと笑う。

「ダディのお友達。アンタ達みたいな趣味の男なんてゴマンといるからね」



「今まで百人位相手してるから。その中の誰かの種でしょ？
ジャパンに来る直前にも黒人三人のぺ○○○○アと朝まで
ファックしたわよ。」
まるで気にもしない様子で平然と答える。

この金髪少女にとっては小便をする位、自然な行為のようだ。
「ますます嬉しいじゃねえか！よし、日本の土産に、俺達の
種もくれてやるよ」





「よーしいいぞ……」

丹念にカスを舐め取るんだ……おッオッ」

真っ赤な舌先がチロチロと裏筋を舐める。
ボコボコと浮き出た血管の上を、涎を塗れさせ
上下する。

包皮の隙間に溜まった恥垢も丁寧に舐め取る。
ちゅぽつと口を離すと、傘の張った大人の
生殖器をうっとりとした表情で見つめる。

「ふふ、いいディックだわあ……」

ふうっと思を吹きかけると、ピクンと竿が
反応する。

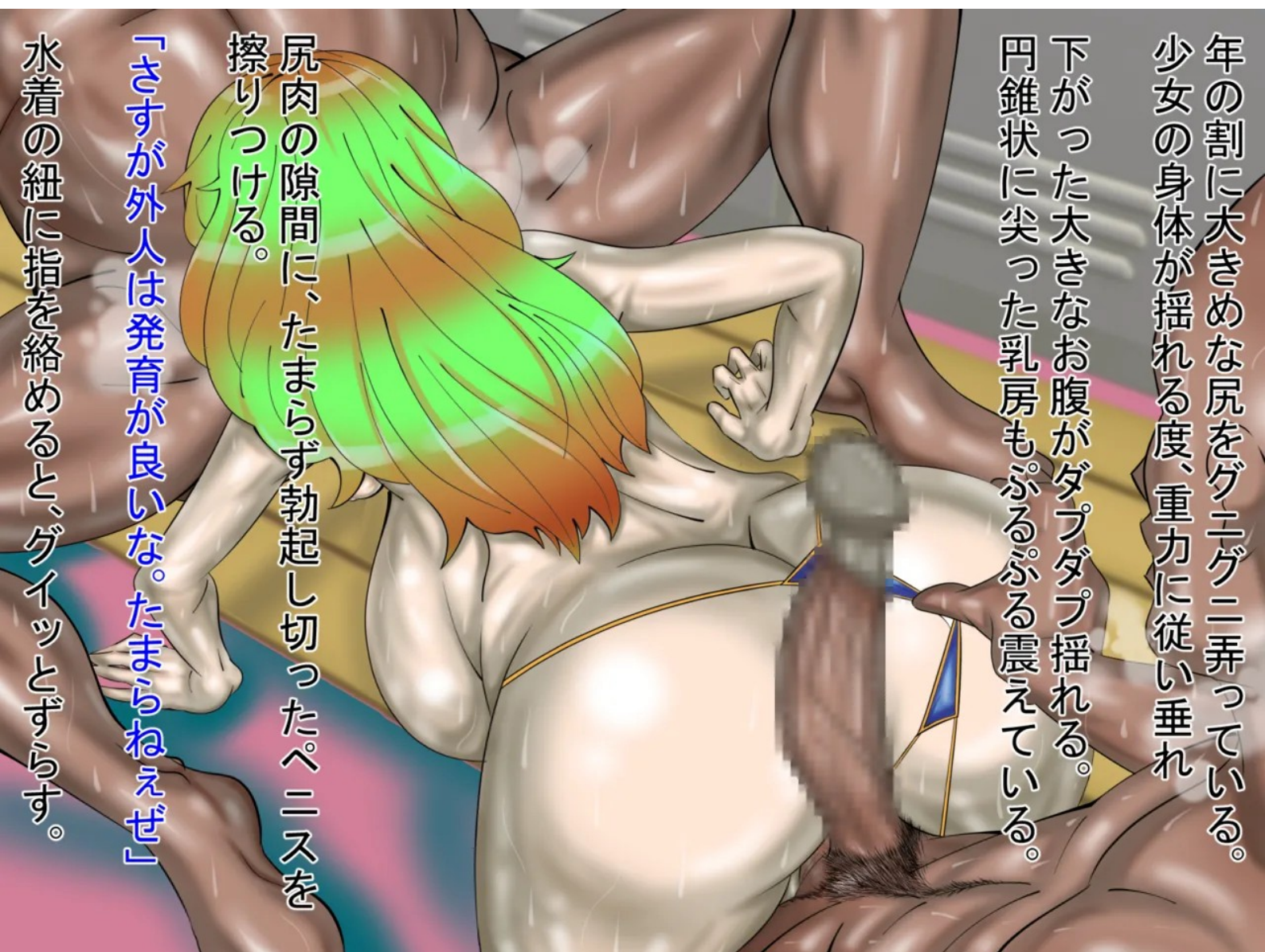
「こりやすげえ、相当、仕込まれてるな」

年の割に大きめな尻をグニグニ弄っている。
少女の身体が揺れる度、重力に従い垂れ
下がった大きなお腹がダブダブ揺れる。
円錐状に尖った乳房もぶるぶる震えている。

尻肉の隙間に、たまらず勃起し切ったペニスを
擦りつける。

「さすが外人は発育が良いな。たまらねえぜ」

水着の紐に指を絡めると、グイッとずらす。



ピンク色のアナルが露になった。

男は尻肉を揉み解しながら、左右に押し広げる。
親指の先で敏感な窄まりを弄る。

「あー！おッほう……！」

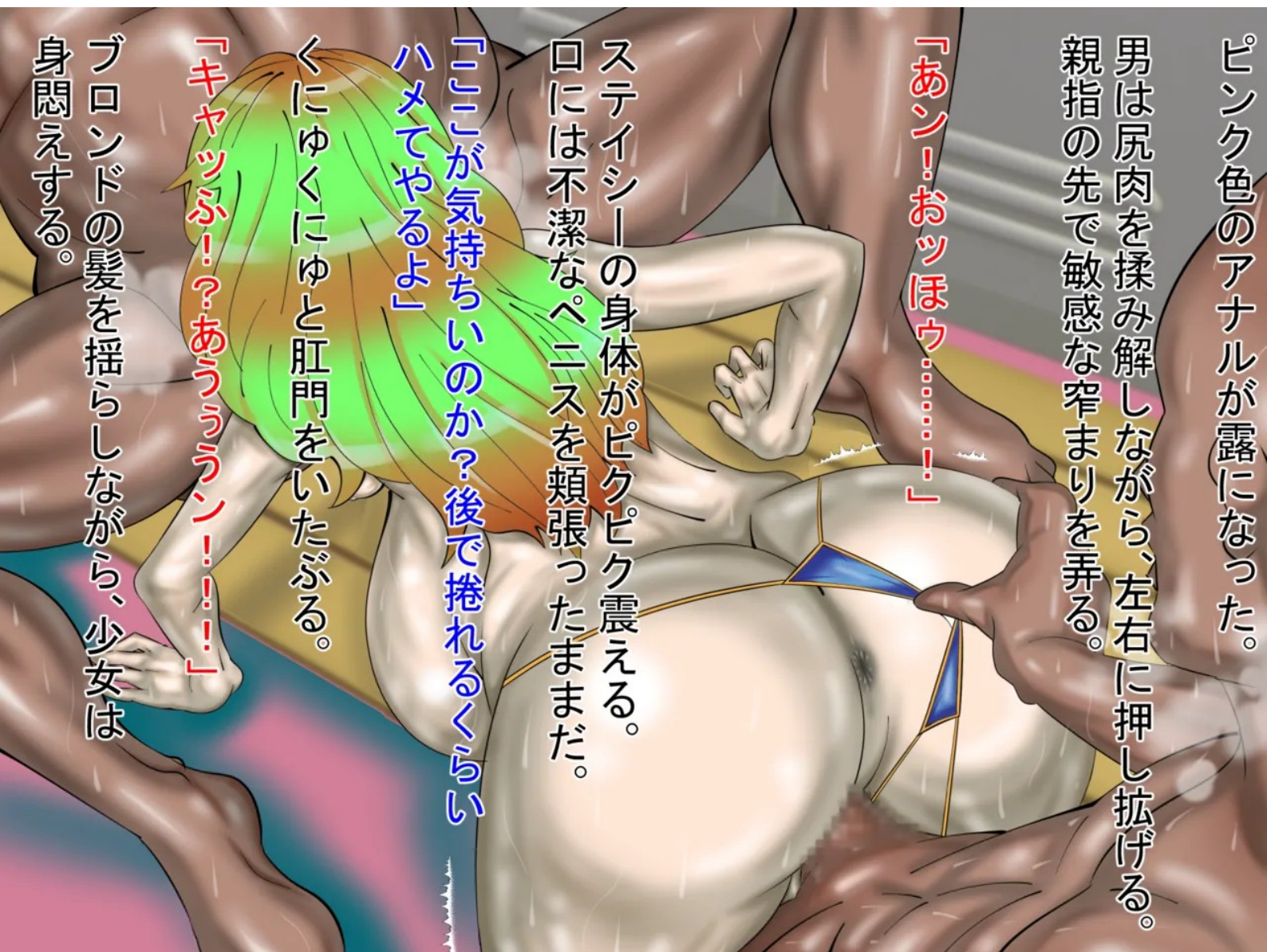
ステイシーの身体がピクピク震える。
口には不潔なペニスを頬張ったままだ。

「こーが気持ちいいのか？後で捲れるくらい
ハメてやるよ」

くにゅくにゅと肛門をいたぶる。

「きゃッふー！？あうううん……！」

ブロンドの髪を揺らしながら、少女は
身悶える。





可愛らしいメスの嬌声に興奮したのか、素股をしていた男がペニスを引き抜くと、先走りがビュルツと弾ける様に飛び出す。

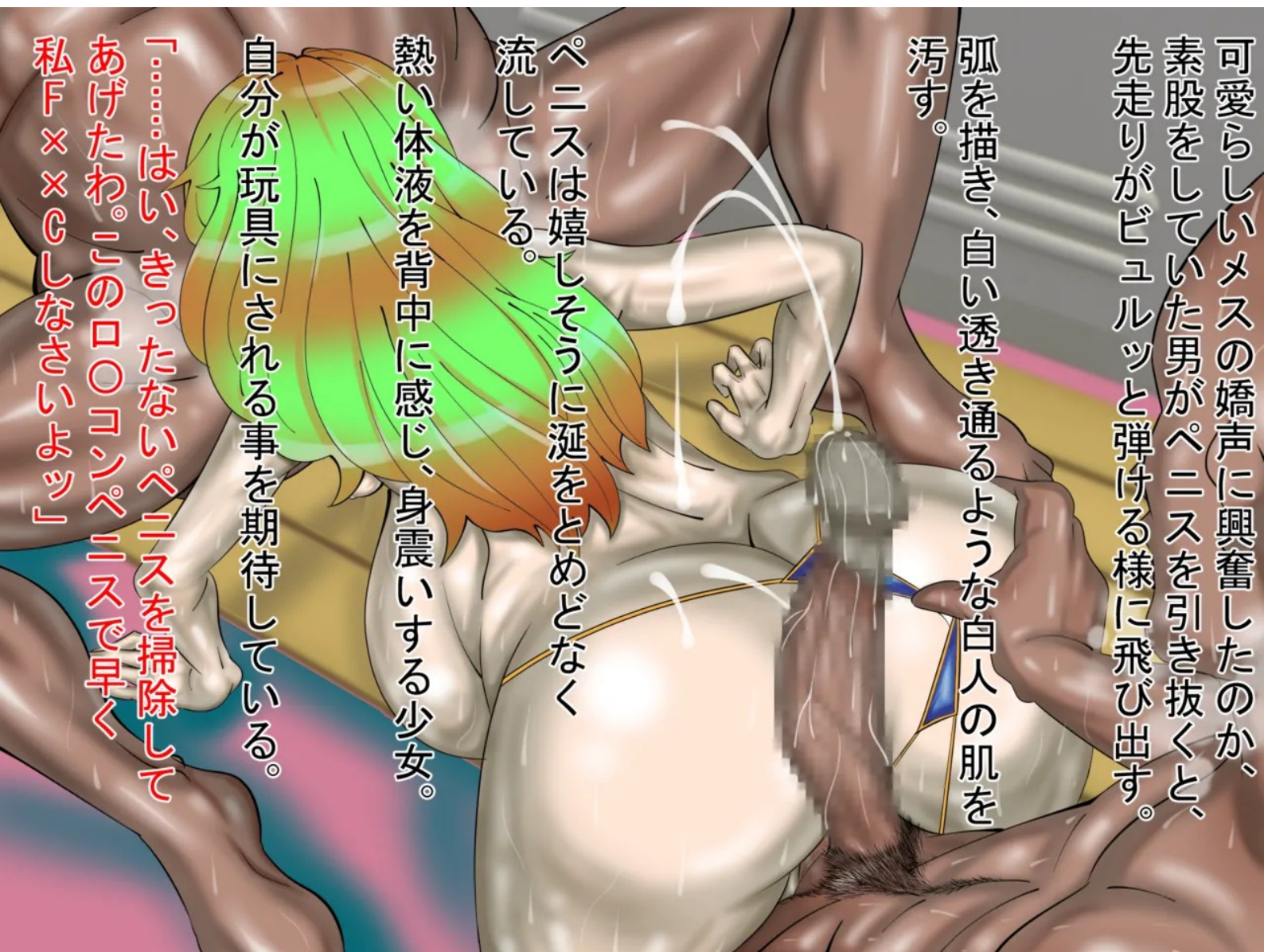
弧を描き、白い透き通るような白人の肌を汚す。

ペニスは嬉しそうに涎をとめどなく流している。

熱い体液を背中に感じ、身震いする少女。

自分が玩具にされる事を期待している。

「……はい、きつたないペニスを掃除してあげたわ。このロ○コンペニスで早く私F××Cしなさいよッ」





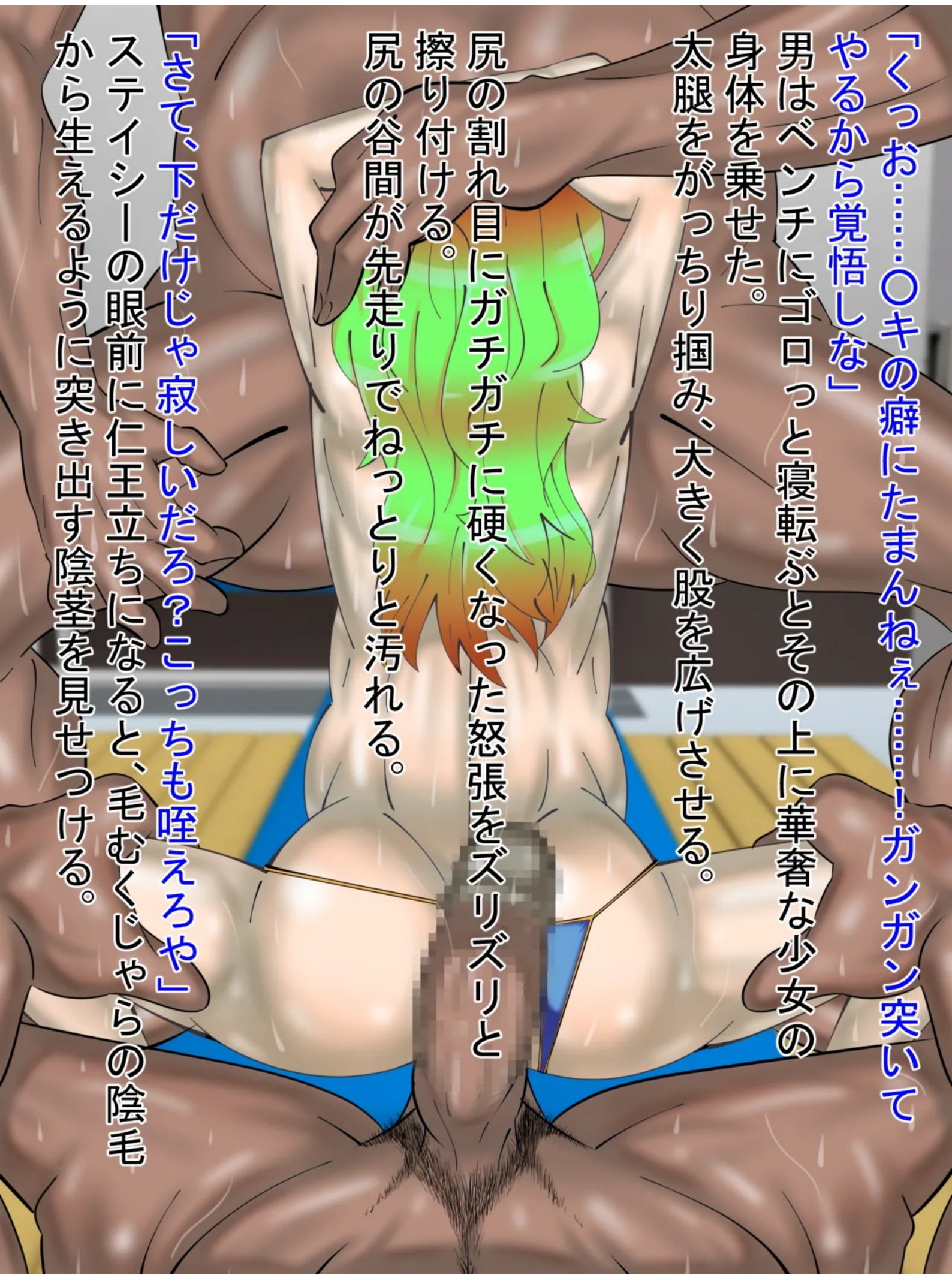
「くっお……○キの癖にたまんねえ……!! ガンガン突いてやるから覚悟しな」

男はベンチにゴロっと寝転ぶとその上に華奢な少女の身体を乗せた。

太腿をがっちり掴み、大きく股を広げさせる。

尻の割れ目にガチガチに硬くなつた怒張をズリズリと擦り付ける。
尻の谷間が先走りでねつとりと汚れる。

「さて、下だけじゃ寂しいだろ? こっちも啜えろや」
ステイシーの眼前に仁王立ちになると、毛むくじやらの陰毛から生えるように突き出す陰茎を見せつける。



「随分不潔なディックね。そうやっていつも〇共に啜えさせてたの？」
余った包皮を弄り回しながら、口元に引き寄せる。

「グツサくてイイわよこのペニス。たっぷり可愛がつてあげるわ」

グブブツブツ

太い陰茎が形の良い唇を押し広げ、口内に引き込まれる。
ぶぽっぶぽっぶぽっぶぽっ

汚らしい水音が室内に響く。
赤黒い茎はすぐに涎まみれになった。

「ジャップのチンカスもなかなか美味しいじゃない」
ペニスからふはあと口を話すと、シュコシュコと陰茎を
扱きながら男をねめつける。

「生意気なクソガキだ。こいつが欲しいだろ……ッ！」

ズブズブズブッ

「おッ……ウー！ふ、太……ッ……アウ……！！」

小さな膣口に亀頭を擦りつけていたが、一気に押し進める。
ぐばっと穴が開ききり、大人の生殖器を飲み込んでいく。

ズッ

ブッ
ブッ
ブッ
ブッ

「ほオ、こりや随分とこなれてるなッ……でもキツキツだッ」
ゆっくりと引き抜き、また勢いよく押し込む。
バチンツと白い尻をひっぱたいた。

「キヤッはッ！アッうう！！！！」
ペニスを押し込まれる度、可愛らしくて下品な嬌声上がる。



バチンバチンバチンバチンツ
柔肉と丸太程ある男の腿がぶつかり合う。

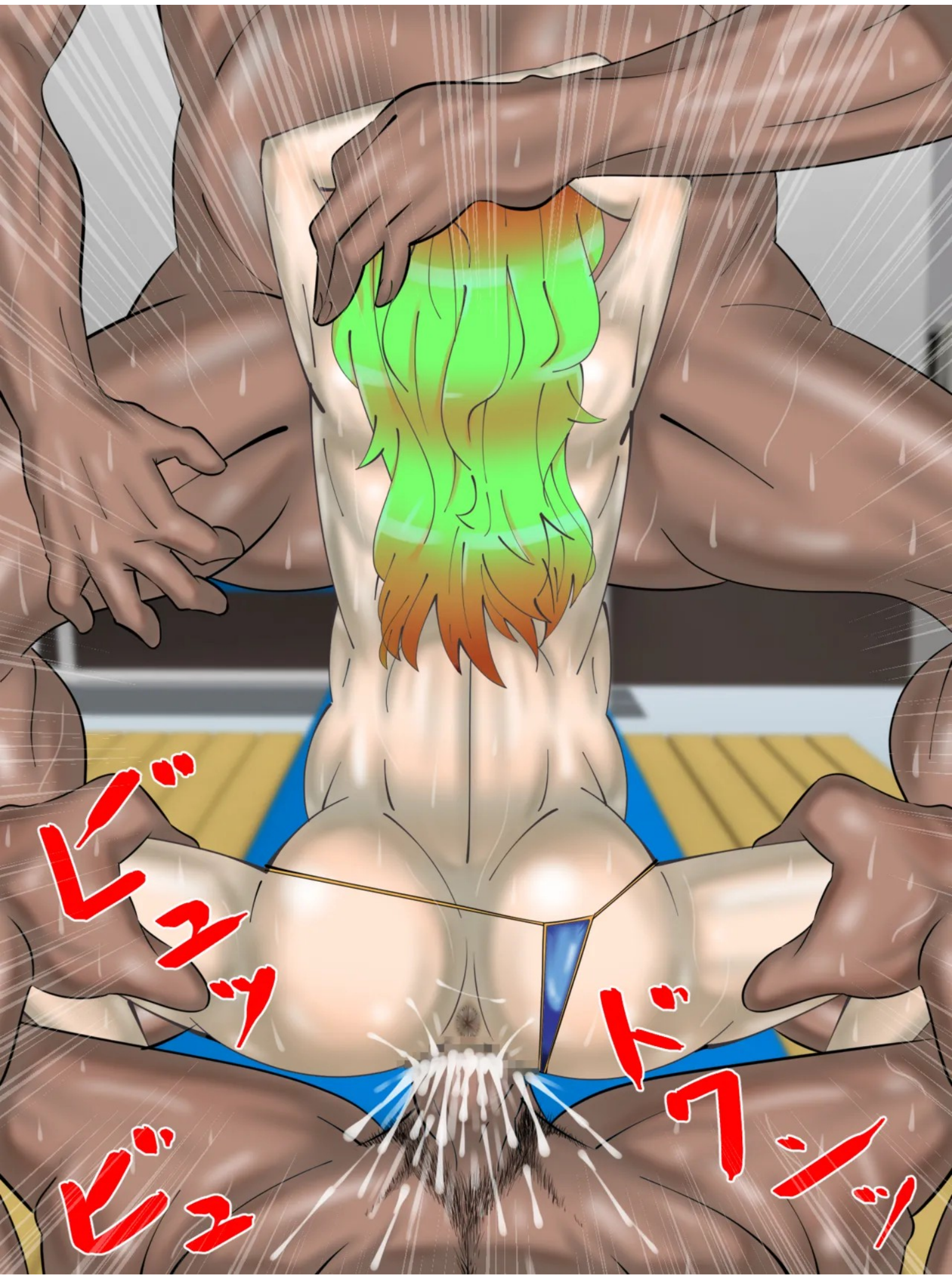
ぐぼっぐぼっぐぼっ

喉奥まで男の象徴が入り込み、少女の口内を犯す。
涎と先走りでぶちゅぶちゅと白く絡まり合う粘液。

「んぐっんぐううッぐううッ」

喜びの混じった苦悶の叫び。
目は潤み、頬はだらしなく垂れ下がっている。







体位を変えて後ろからの激しい交尾が始まる。
さつきより大きな腹がよく確認出来る。

「答えろ金髪メス豚ア、お前はどこの
誰だアツ!？」

「あ、アタシ、はあツ、ステ、ステイシーい、ろツ、
ロロロツローズマリーいツ、じゅ、〇いちいちツ
歳ッ!!!
こ、こっちにはアツ、ニホ、ニホンゴのツ、
勉強にツ、来たのツ」

ばちゅばちゅとペニスを突きこまれながらの
自己紹介。

ズルズル引き出されるたび陰唇が捲れあがり、
ドスピンクの内壁が見える。



「勉強だとツ嘘つけッ、日本人のチ○ポが目当てだろうがッ」

「はっひッ、はひッ、おうッおうッおうッ……!!」

ぐりぐりと大人の陰茎で掻き回すたび、悦びの悲鳴が上がる。

「ホームステイかア、けひひッ、さっきの○キはそこの息子かよ。」

オイ、もうやらせたのかア!?!」

「アッはア!これッ、これからッ、ここ、これからアッ!……!!」

「これから?やっぱり、やらせるつもりじゃねえか!」

ドンドンと激しく腰を上下させるたび、大きな腹がダブダブ揺れる。



「この腹の中身は誰のガキだ？
ほんとは分かってるんじゃないか！」

「あああアッオあああッ！……！
ひひッ、だ、ダディ以外の誰かよッ、うひひッ、
な、何十本もオ、この中にいッ、ペニス
ブチ込まれてんだからッあッあッあッ……！！！」

ぐりぐりと肥大化したクリトリスを弄る度、
獣のような悲鳴が上がる。



ゴシユゴシユゴシユゴシユツ

右手で狂ったように太いペニスを扱き続ける。

手のひらは先走りと涎でベトベトになっていた。

ハアハアツハアハアツ!

フウフウツフウフウツ!

はっはっ!はっはっはっ!

動物のような呼吸が部屋中に響いている。

腹の中の塊にペニスが接しているのが判る。



プシップシッ！プシッ！！！！

まだ射精をしていないのに、収まり切れなくなつた雄と雌の体液が溢れ出た。

白い泡状の小便のような粘液。

「おッおッおッ、おうッ、イイぞッ！！！！」

ペニスは三分の二ほどまで進むと進むと押し返される。奥の部屋に先客がいるからだ。





「おッおッおッおほお〜ッ!!!!!!」

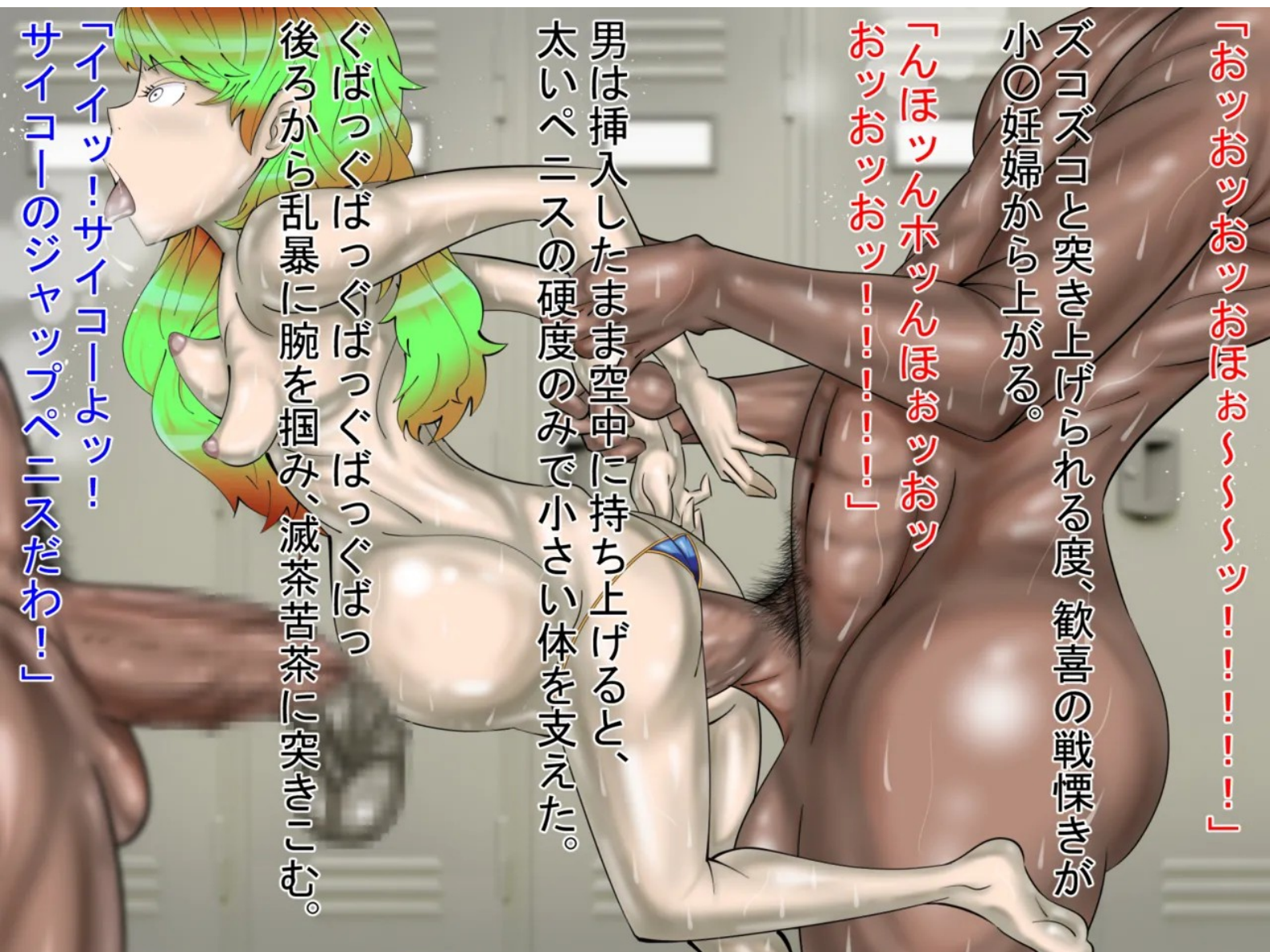
ズコズコと突き上げられる度、歓喜の戦慄きが
小の妊婦から上がる。

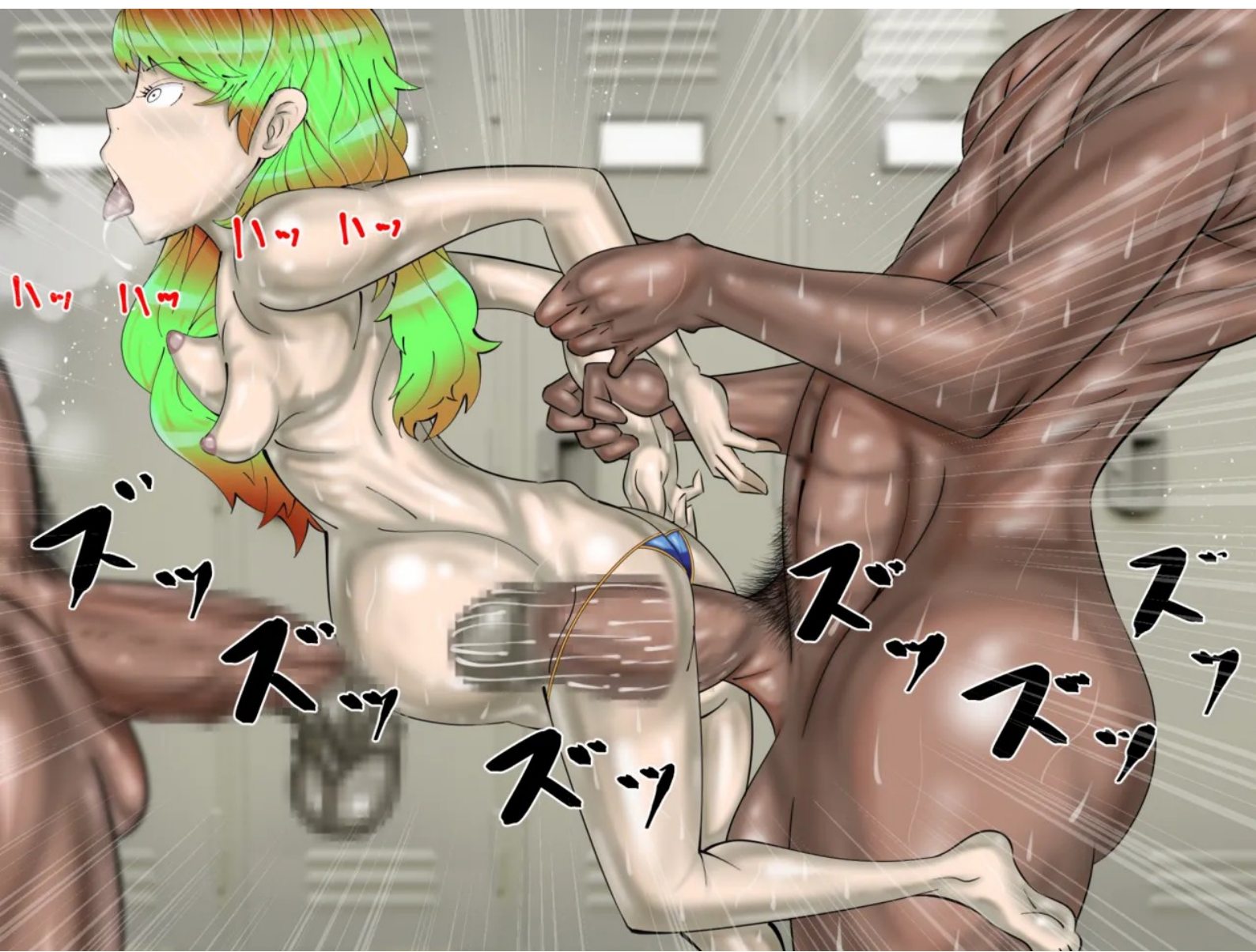
「んほッんほッんほおッおッ
おッおッおッ!!!!!!」

男は挿入したまま空中に持ち上げると、
太いペニスの硬度のみで小さい体を支えた。

ぐばっぐばっぐばっぐばっぐばっぐ
後ろから乱暴に腕を掴み、滅茶苦茶に突きこむ。

「イイッ!サイコーよッ!
サイコーのジャップペニスだわ!」





「おらッ、ケツ触れや!この白豚が!」

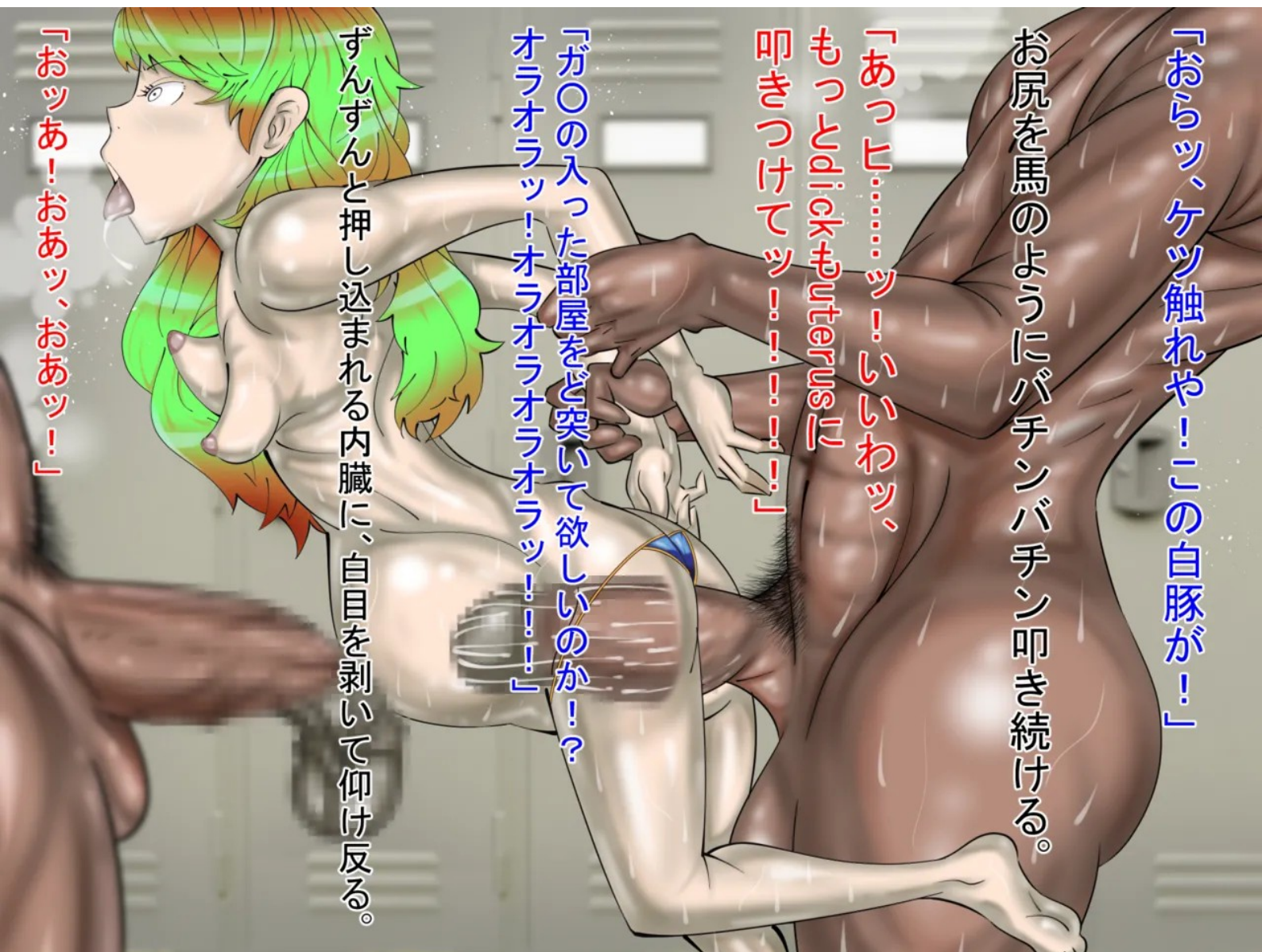
お尻を馬のようにバチンバチン叩き続ける。

「あッヒ……ッ!いいわッ、
もっとtickもuterusに
叩きつけてッ!!!!!!」

「ガ〇の入った部屋をど突いて欲しいのか!?
オラオラッ!オラオラオラオラッ!!!!」

ずんずんと押し込まれる内臓に、白目を剥いて仰け反る。

「おッあ!おあッ、おあッ!」



小さな体はがくんと人形のように
されるがまだ。

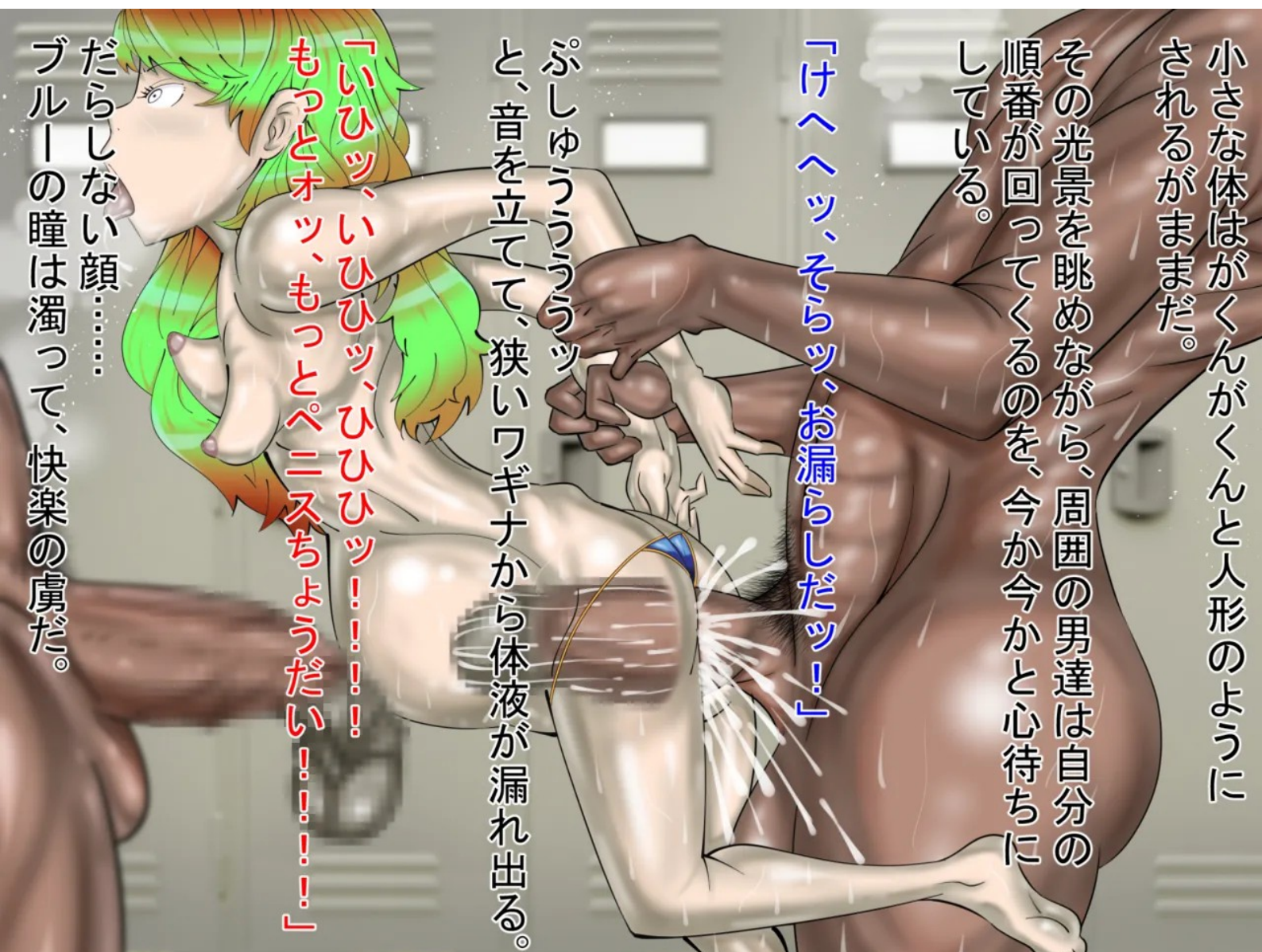
その光景を眺めながら、周囲の男達は自分の
順番が回ってくるのを、今か今かと心待ちに
している。

「けへへッ、そらッ、お漏らしたッ！」

ぷしゅうっうっうッ
と、音を立てて、狭いワгинаから体液が漏れ出る。

「いひッ、いひひッ、ひひひッ!!!!!!
もっとオッ、もっとペニスちようだい!!!!!!」

だらしない顔……
ブルーの瞳は濁って、快楽の虜だ。



「おっらッ、〇キミルク出してみろッ、
〇歳のミルクをオッパイから
噴出させるッ!!!!」

大きな指が未だ発展途上の乳房を扱きあげる。
ぎゅうぎゅうと絞り上げるように乳房に
刺激を与え続けると、ぴゆるぴゆると
白い液体が先端から垂れ始める。

「あッあッはアッ!出るッ、出ちやうッ!!!!」

ビュルッと白い液体が乳首から放たれ、
弧を描く。

「はひッはひッ、ベイベーのミルクがッ、
漏れっ、漏れてるッ」



太い茎がビーンツと天を突くように跳ね上がる。



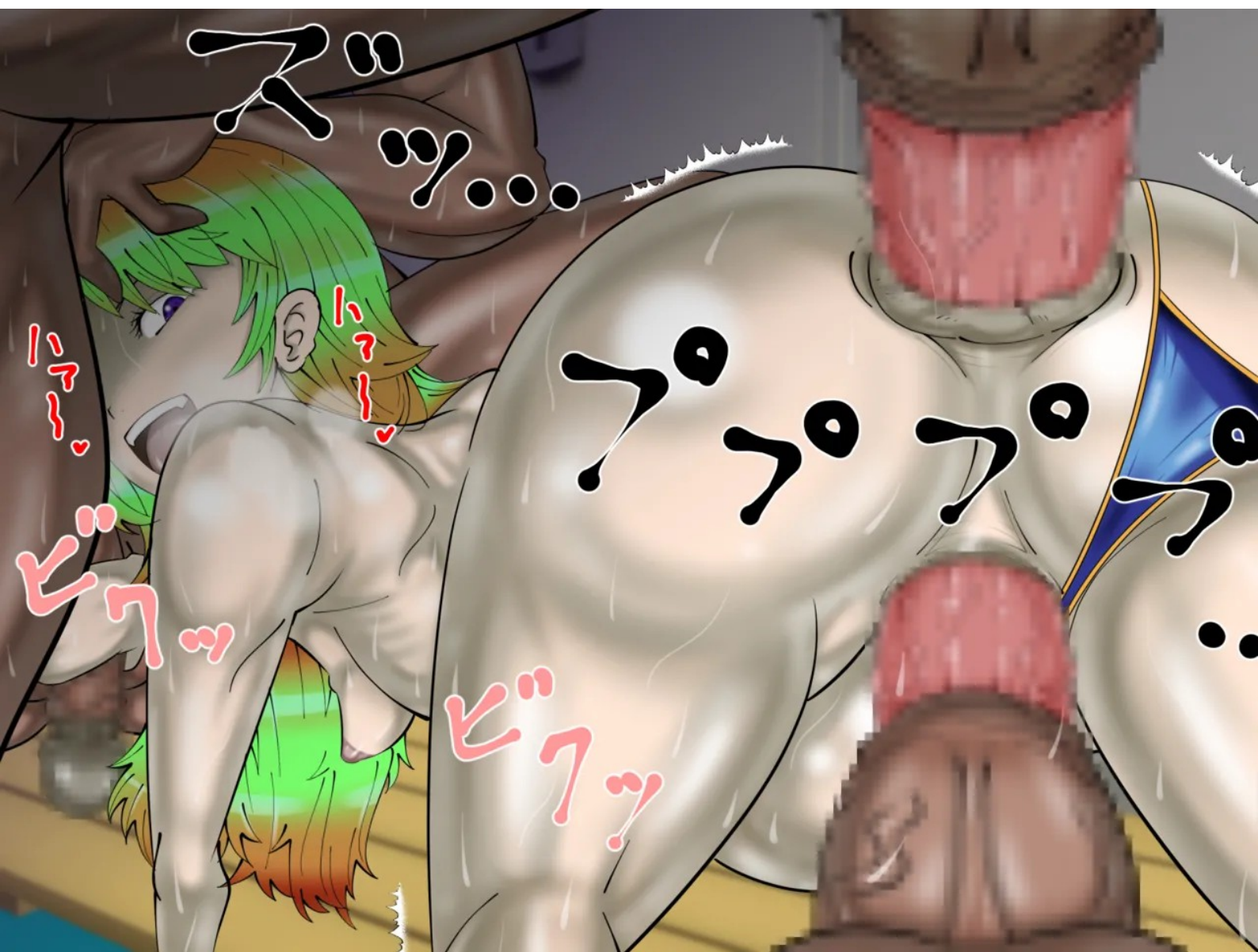
「オラ、イケッ！だらしねえイキ顔晒しながら、
思い切りイツちまえッ！！！」

「iiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

扱かれて伸びきった乳頭と亀頭から
一斉に白い液体が放出された。

粘度の濃い体液が○共の母乳に混ざり合う。





暗がりにも肉の塊が蠢く。

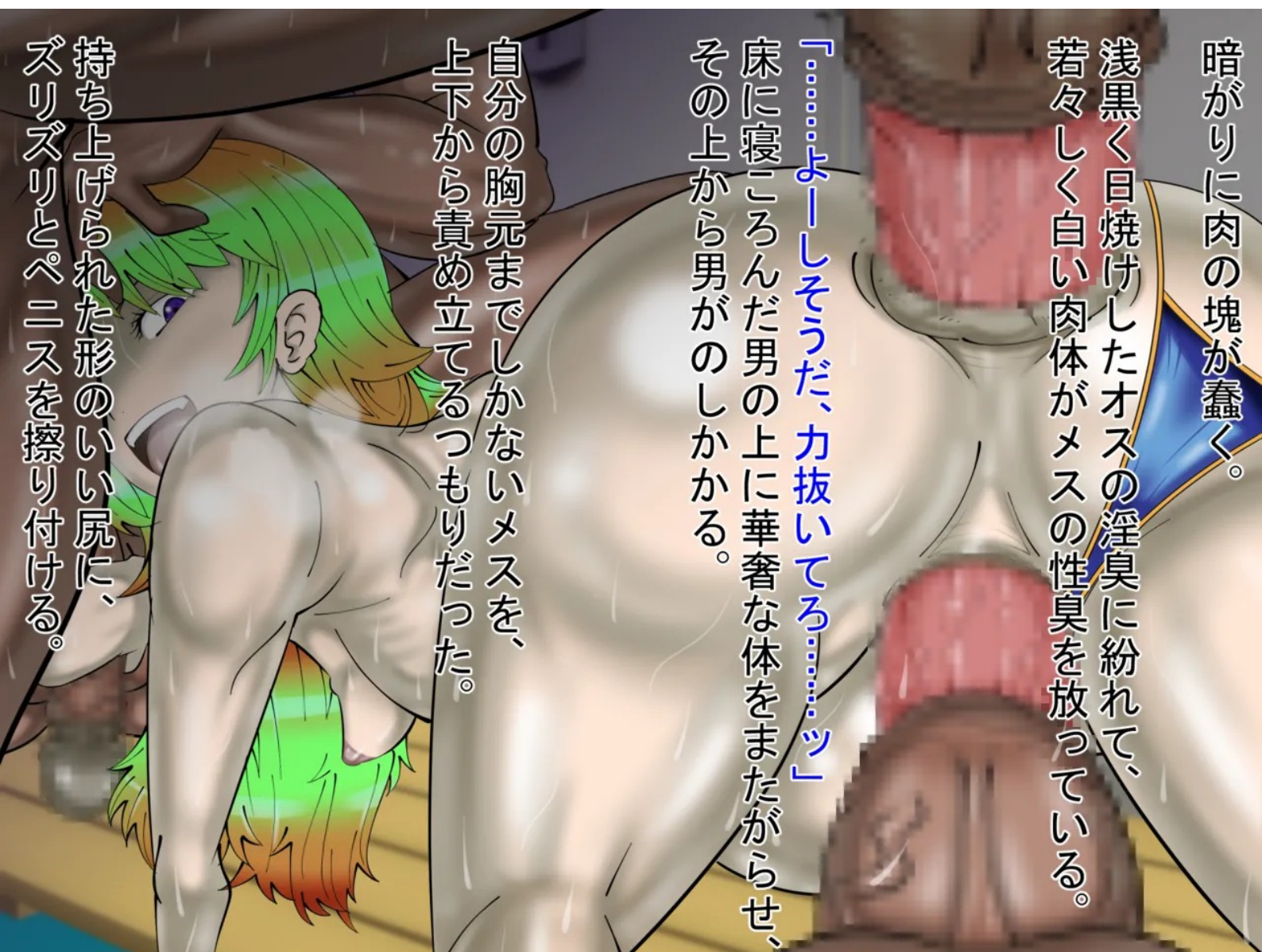
浅黒く目焼けたオスの淫臭に紛れて、
若々しく白い肉体がメスの性臭を放っている。

「……よしそうだ、力抜いてろ……ッ」

床に寝ころんだ男の上に華奢な体をまたがらせ、
その上から男がのしかかる。

自分の胸元までしかないメスを、
上下から責め立てるつもりだった。

持ち上げられた形のいい尻に、
ズリズリとペニスを擦り付ける。



「そオら入るよ〜ッ……おらッ」

ズぶぶぶッブブブッブッ

「おッっっッッぎッい、イイッ」

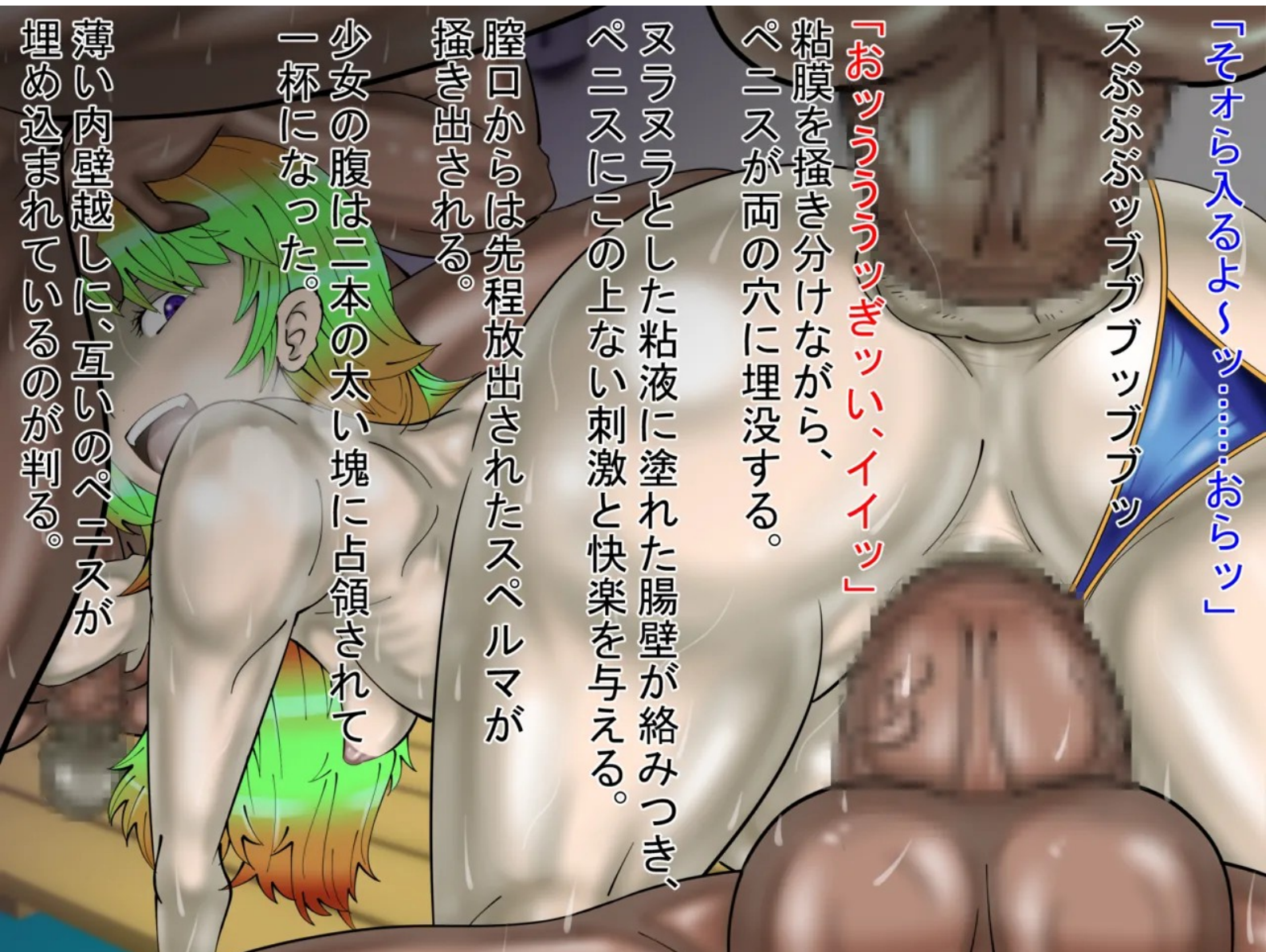
粘膜を掻き分けながら、
ペニスが両の穴に埋没する。

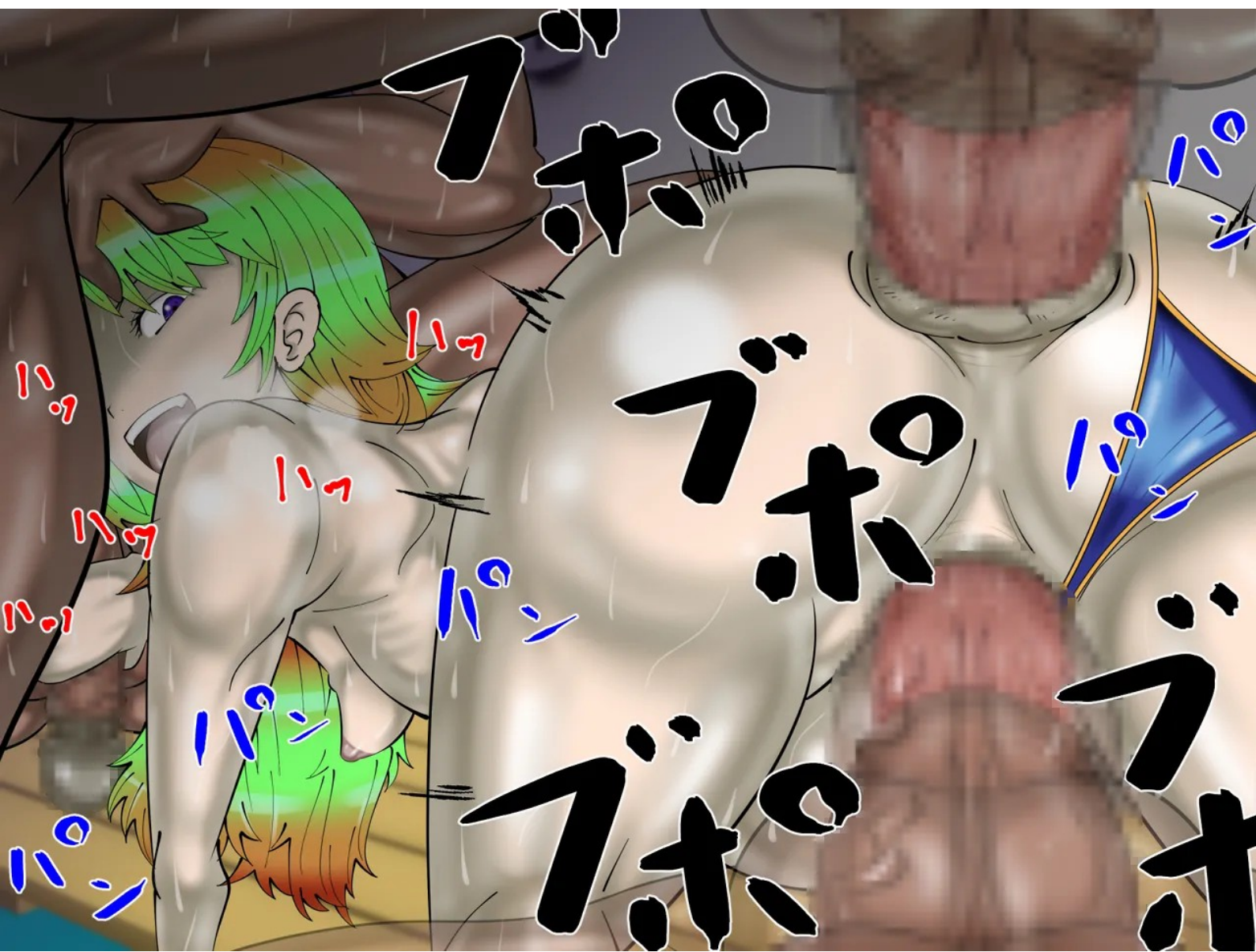
ヌラヌラとした粘液に塗れた腸壁が絡みつき、
ペニスにこの上ない刺激と快楽を与える。

膣口からは先程放出されたスperlマが
掻き出される。

少女の腹は二本の太い塊に占領されて
一杯になった。

薄い内壁越しに、互いのペニスが
埋め込まれているのが判る。





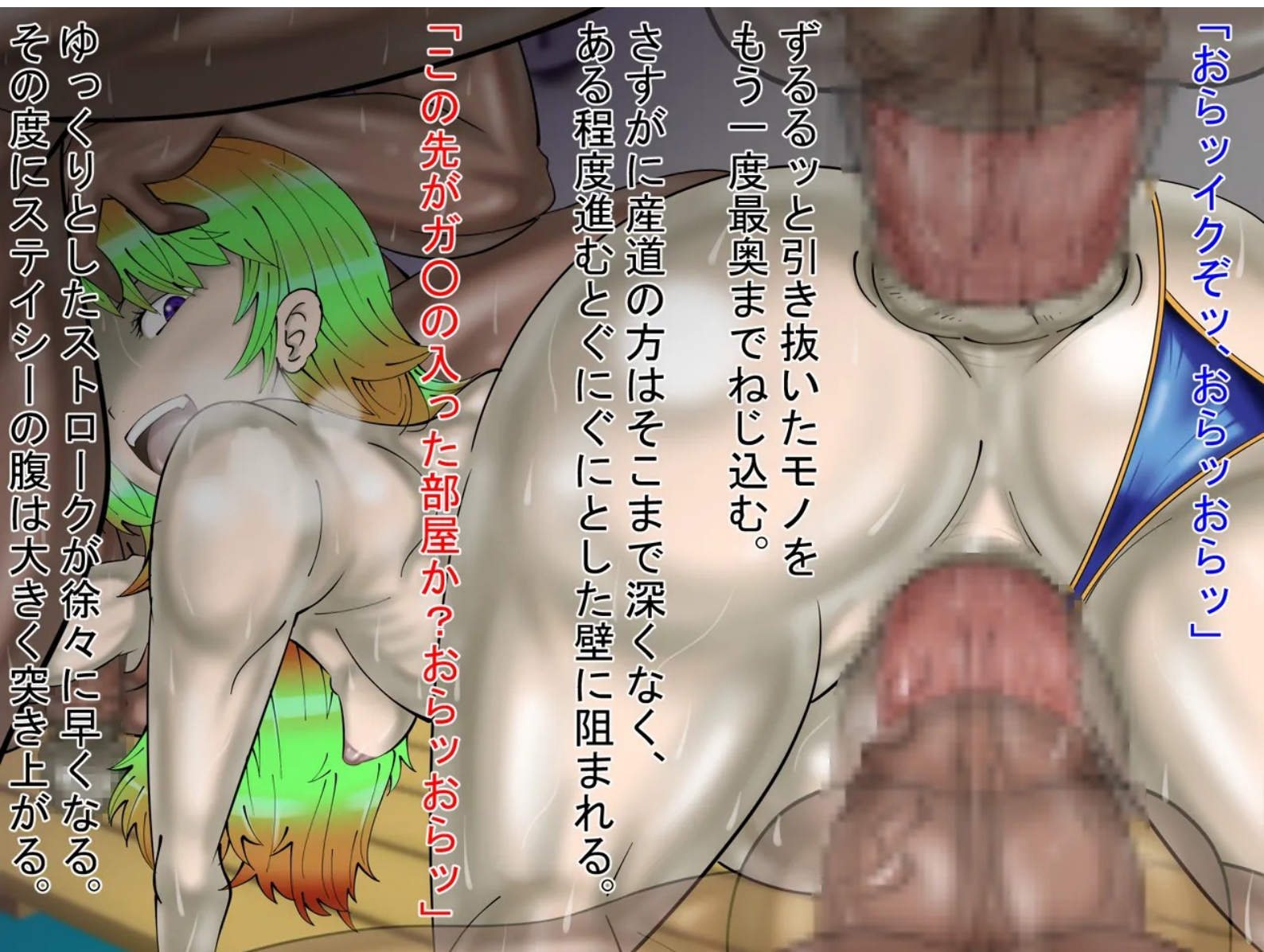
「おらッイクぞッ、おらッおらッ」

ずるるツと引き抜いたモノを
もう一度最奥までねじ込む。

さすがに産道の方はそこまで深くなく、
ある程度進むとぐにぐにとした壁に阻まれる。

「この先がガ〇の入った部屋か？おらッおらッ」

ゆっくりとしたストロークが徐々に早くなる。
その度にステイシーの腹は大きく突き上がる。



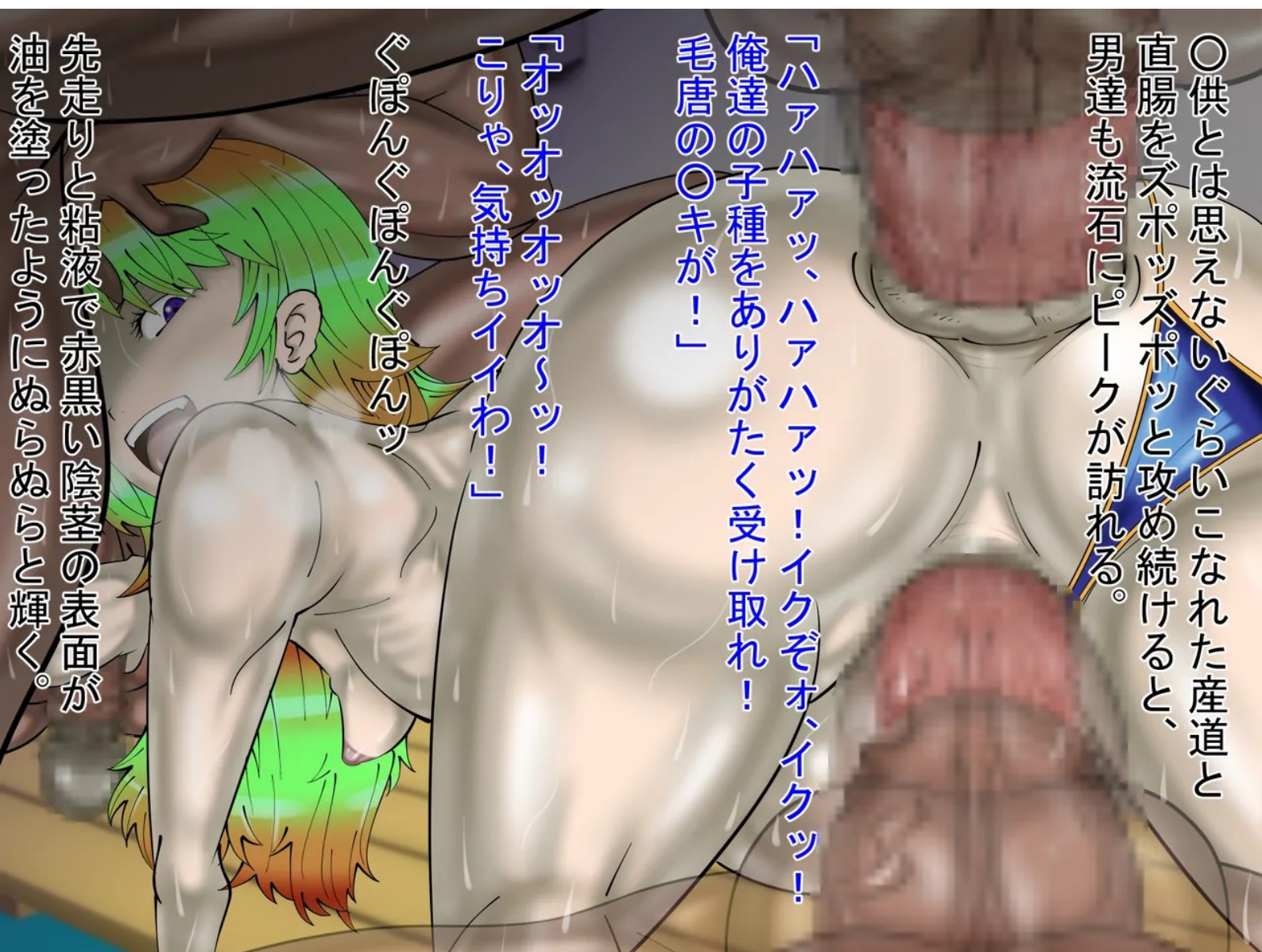
○供とは思えないぐらいこなれた産道と直腸をズポツズポツと攻め続けると、男達も流石にピークが訪れる。

「ハアハアツ、ハアハアツ！イクぞオ、イクツ！俺達の子種をありがたく受け取れ！毛唐の○キが！」

「オッオッオッオッ！
こりゃ、気持ちいいわ！」

ぐぽんぐぽんぐぽんツ

先走りと粘液で赤黒い陰茎の表面が油を塗ったようにぬらぬらと輝く。



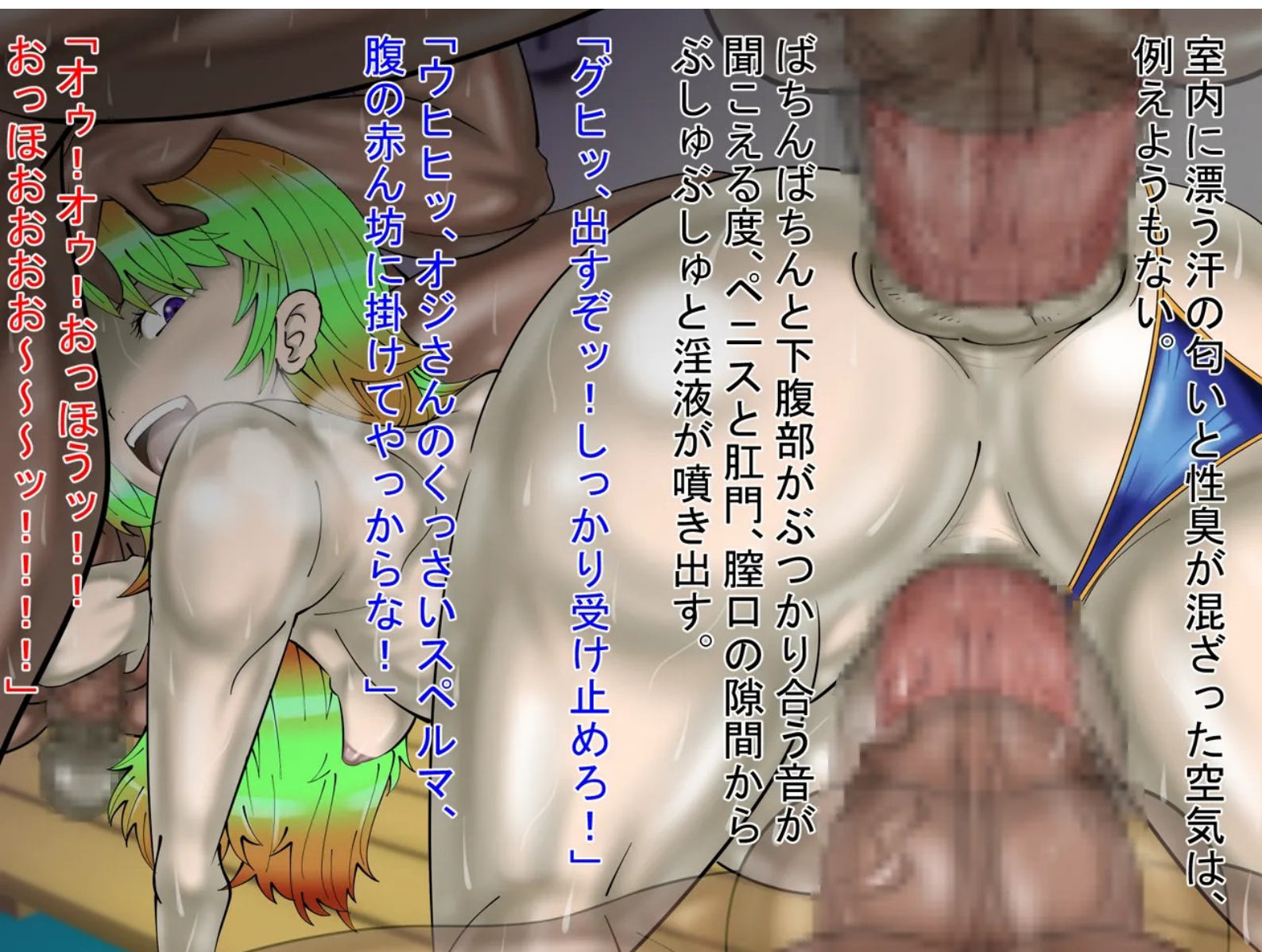
室内に漂う汗の匂いと性臭が混ざった空気は、
例えようもない。

ばちんばちんと下腹部がぶつかり合う音が
聞こえる度、ペニスと肛門、膣口の隙間から
ぶしゅぶしゅと淫液が噴き出す。

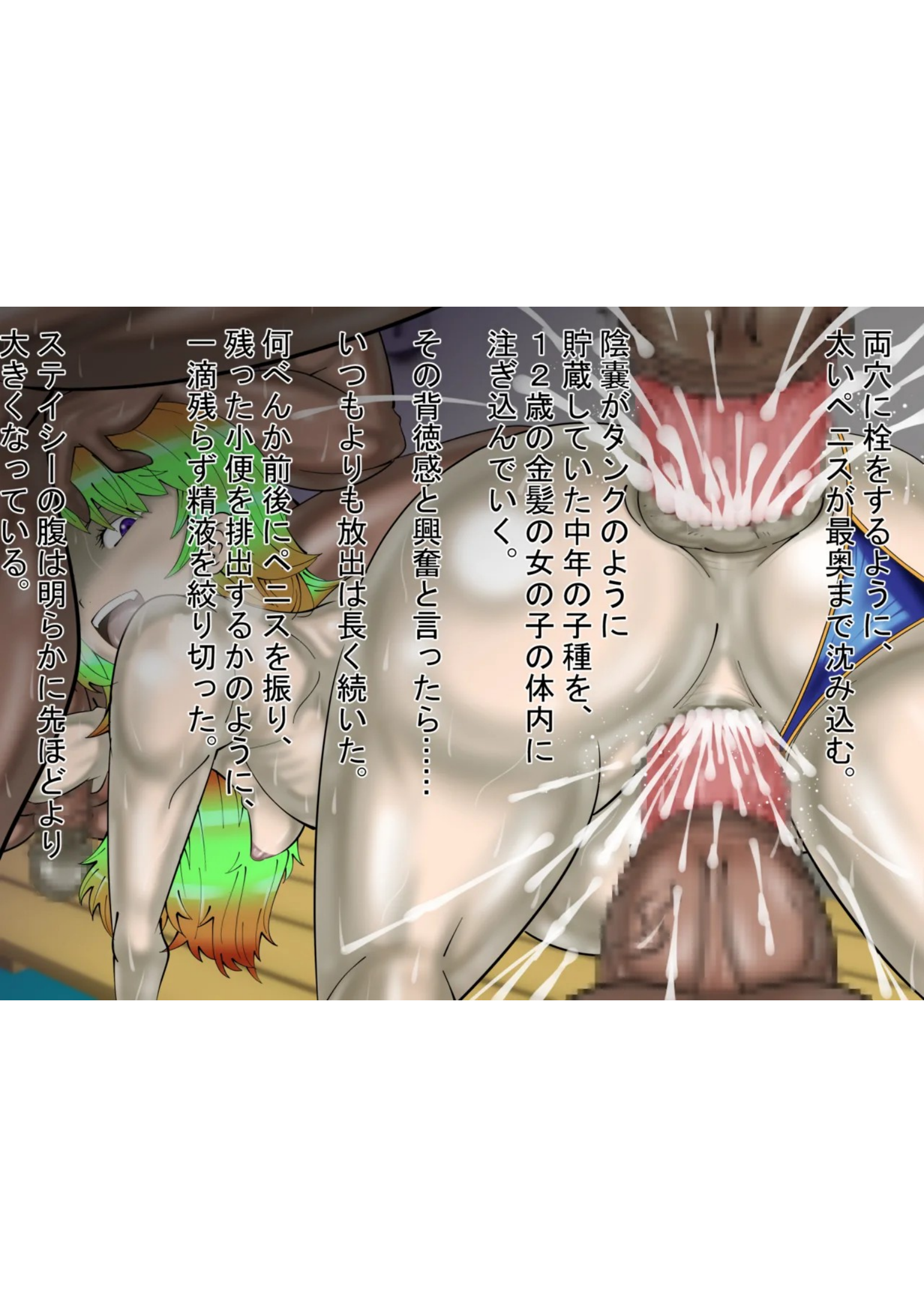
「グヒッ、出すぞッ！しっかり受け止めろ！」

「ウヒヒッ、オジさんのくっさいスペルマ、
腹の赤ん坊に掛けてやっからな！」

「オウ！オウ！おっほうッ！！
おっほおおお~~~~ッ！！！！！！」







両穴に栓をするように、
太いペニスが最奥まで沈み込む。

陰囊がタンクのように
貯蔵していた中年の子種を、
12歳の金髪の女の子の体内に
注ぎ込んでいく。

その背徳感と興奮と言ったら……

いつもよりも放出は長く続いた。

何べんか前後にペニスを振り、
残った小便を排出するかのよう
に、
一滴残らず精液を絞り切った。

ステイシーの腹は明らかに先ほどより
大きくなっている。

濃い中年の精液が注ぎ込まれ、胎内を満たしていくのを感じていた。

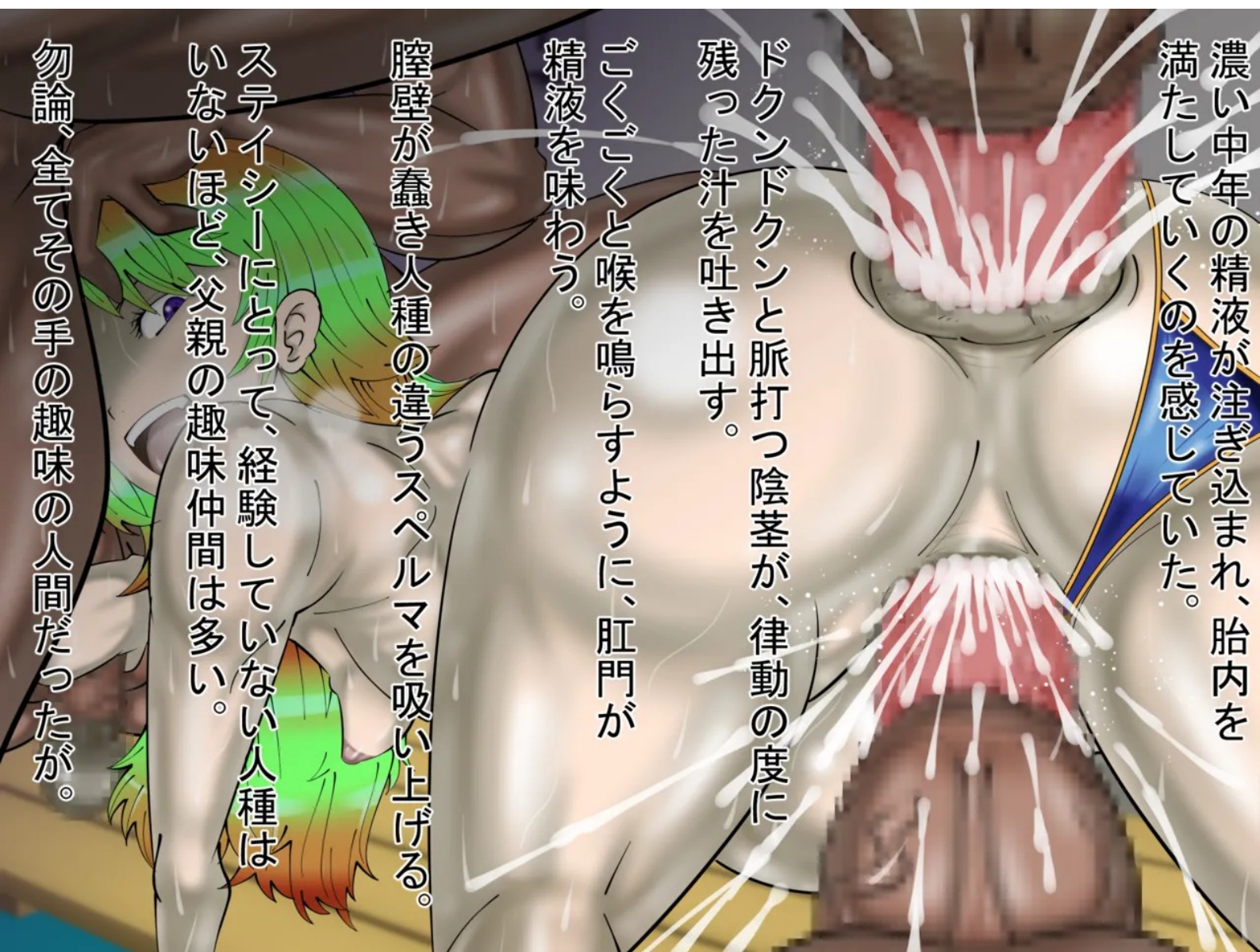
ドクンドクンと脈打つ陰茎が、律動の度に残った汁を吐き出す。

ごくごく喉を鳴らすように、肛門が精液を味わう。

膣壁が蠢き人種の違うスペルマを吸い上げる。

ステイシーにとって、経験していない人種はいないほど、父親の趣味仲間が多い。

勿論、全てその手の趣味の人間だったが。





ずるずるとペニスが引き抜かれ、
ずぼっと両穴から抜け落ちる。

竿と穴の間に、ねばついた橋が架かった。

少女の恥ずかしい穴が、ひくひく蠢き
大きく収縮する。

「あっはア……!!
出るッ出ちやうウウッ……!!」





ブシャッ！ブツシュウウウッ！
ビュッビュッビュッ！

水道の管が破裂したかのような勢いで、
白い体液が逆流する。

「アハハッ！すっ「いいッ！と、止まらないッ！」

ブシュッブシュッ！ビュルルウッ！

床にオスのモノとメスのモノが
混ざり合った粘液が、みるみる広がる。
知性の感じられない表情で、

放出の快感に酔いしれ涎を垂らす。

「ハアハア……残念ね、

これだけの量と濃さなら、ジャップの
赤ちゃんがここで作られたわ」

大きなお腹をさすりながらニヤつく。



「あひッあひッあひッ
あひひひひひひッ!.....!」

「嬉しそうな声出しやがって、
とんでもねえビッチな○キだな、てめえは!..!」

形の違う陰茎で掻き回されて
子宮が左右にうねるのが判る。

「はあッはあッ!」

墮りるうッ墮りちやううッうッうッ

.....も、もっと、突いてッ!

ガンガンッ、ぶっ壊すぐらいにッ!.....!」

よだれを垂らしながら、
だらしないアへ顔のまま、懇願する。

とても10歳の少女とは思えない。
すでに快樂で頭のネジが吹っ飛んでいる。

「ひひひッ、乳首おッ立てやがって、オラッ、
これでどうだア!？」

両の乳首をキスさせると、コリユコリユと
擦り合わせる。

両手にはペニスを持ち、突きあげられる動きに
合わせて、ゴシゴシ扱く。

「はひッはひッはひいッッッッ!
もっほオ、チンポちようだいいいいッ」

グボッグボッグボッ

ブブブブブブッブボボボッ



「ハアハアツ……こんなビッチの赤ん坊は
一体どんなだろうな!？」

「とんでもねえ……オツオツオツ、ガ〇が
生まれるに違い、おッおッ、ねえぜツ!」

「ハアハアツ! 大人としてこういう〇キには
お仕置きしねえとな! おっほオ!」

○供を取り囲んで、性処理の道具として
好き放題弄びながら、そんなことをのたまう。

ペニスは嬉しそうに産道の中を
びゅくびゅくとのたうつ。



最後のー振りとはかりに、滅茶苦茶に腰を振る。

ズぼズぼズぼッ！！！！グポッグポッ！！！！

「おホオッ、イク、イクぞッ！！！！」

本目、何度目か判らない射精の感覚。ペニスが痺れマヒするが、快感だけはより強くなっている。

ステイシーも無理やりイカされまくったせいで、腰はガクガク、膣口は緩みきって、上の口同様に、白い涎を噴出し続けている。

バンヤッ　　バンヤアアヘ

『ヘッ、ガキの癖に男とセックスした証拠、腹にぶら下げやがって。オラ、カメラで撮ってやるから笑顔でポーズしな』

『フフツ……このド変態ロ××ンF××C野郎!』

赤黒いペニスに囲まれながら、カメラに向かい真っ赤な舌を出し、飛び切りの笑顔に向けファック・サイン。

「ヒへへ、生意気な糞ビッチが。お望み通りブツ掛けてやるぜ!」

男達はゴシゴシとペニスを扱き上げ、射精へと導く。



「おうッ！おうッ！いいイクぞッ！！！」

「クソガキ！こいつを食らえッ！」

陰茎から湯気が上がり、性臭が辺りにムツと濃く漂う。

「ハアハアッ！ハアハアッ！！」

「その生意気なツラにブツ掛けて汚してやるッ！！！」

「クッサいペニスねッ！早くよこしてよッ！」





「おおあッ出るッ出るッ……!!」

「あああああッ! うほおおおおッ!」

「ひゃっはア! サイツコーよッ! もっと汚いスペルマ、
ブツ掛けなさいよッ!」

「オラッ、これでいいか!? 綺麗な金髪もぐしゃぐしゃだぜ!」

「ヒヤハハッ! お腹にも掛けてッ! 赤ちゃん入ってパンパンの
ここにも出してよッ!」



「口開けるッ、4人分飲ませてやるッ!!!!!!」

「いいわ、いいわよッ!クサくてネバついたジャップの
スペルマ、全部飲んであげるッ!!!!!!」

「その可愛い舌に……クッお……!出すぞッ!」

どびゆるッびゆるッ!……ぶしゃあああッ!……!!

ビュルッビュクッ!ビュルルルルッ!……!!

「ひへへッ、いっぱいだあッ!○キの身体が精子で
いっぱいだあッ!!!!!!」



「ほおら、ブロンドのメス○キの放尿だ、しっかり撮れよッ」
両足をM字に抱え上げると、大きく股を開かせる。

「あはア……pissがア……!!」

プシッ! ジョロッ ジョロロロロロオオオオオオ

ハァ、ハァ、

パッ
ツァ

アアアアア

少女の排尿の穴がかわいらしくヒクつき、
黄金色の小水が湯気を立てながら、勢いよく放出される。

「おうおうタツプリ出すじゃねえか。しかし、とんでもない
○キだな。いくつから仕込まれてんだよ」

ステイシーはふんツと鼻を鳴らせる。

「せいぜい4、5年よ。statesはド変態のぺ○○○○アが多いから相手は幾らでもいるけどね」

自慢気に笑みを浮かべる。

「すげえな、流石は自由の国だ」

「ふう〜ツキモチ良かったわよ。……今度は、あんた達のオシッコ飲んであげよっか。出したいんでしょ？」

○供とは思えない笑みで彼女は笑った。



——結局、家に帰ってきててもステイシーは居ないし、もう一度探しに行こうと思った矢先、タクシーが家の前に到着する。

「二人で帰ってきてちゃったわ」

どこに行っていたか尋ねると、「買い物」とだけ答える。まあ、これだけ日本語が流暢なら困らないよな。機転も利きそうだし。

「あゝお腹すいちゃった。今日のdinnerは何？」

全く悪びれない様子に彼女のタフさを感じる。心配して損した。

……でも、本当に買い物だったのかな……？

「だ、誰……?」

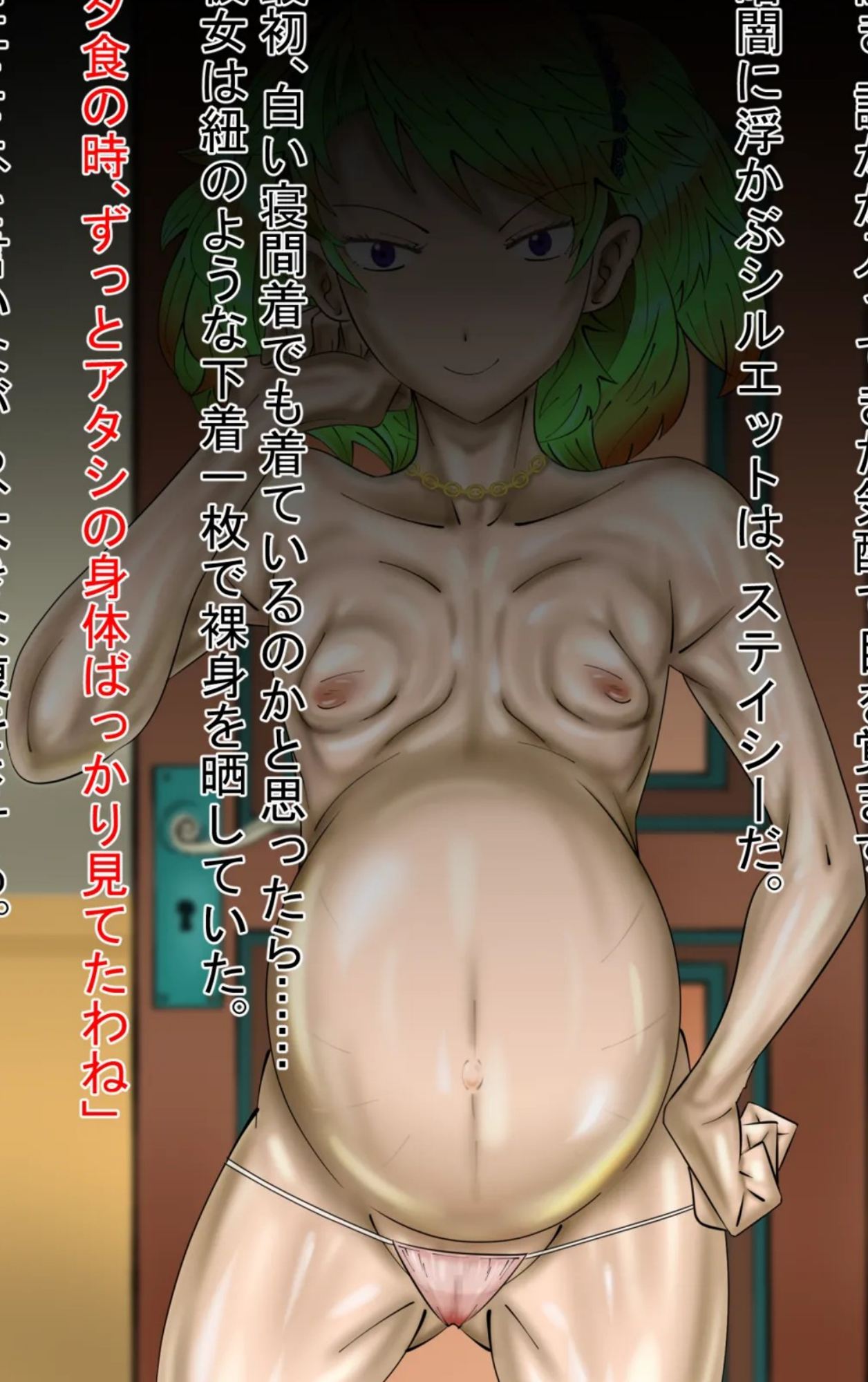
その夜、僕が自室のベッドで寝転んでいると、ドアがかちやりと開き、誰かが入ってきた気配で目を覚めます。

暗闇に浮かぶシルエットは、ステイシーだ。

最初、白い寝間着でも着ているのかと思ったら……
彼女は紐のような下着一枚で裸身を晒していた。

「夕食の時、ずっとアタシの身体ばっかり見てたわね」

特に「こ」と言いながら、大きな腹をさする。



「ヨウスケも赤ちゃん作る為の気持ちイイ遊びをしたいんでしょ？」

ステイシーの息は荒く、頬は上気してる。

彼女は腰に掛かる細い紐をしゆるりと解いた。

重力に従い、小さい布が床に落ちる。

……べっちよりと床に張り付き、湿っているのが判る。



「じゃあ、セックスしよっか」

彼女はベッドに乗り上げ僕に圧し掛かってくる。

「セックスしながら、この子のパパの事教えてあげるわ」











